表紙の写真は、御用水跡街園愛護会調査隊と事務局が撮影した秋から初冬の堀川です。撮影場所は下流域の名古屋国際会議場付近、上流域の猿投橋～夫婦橋間です。

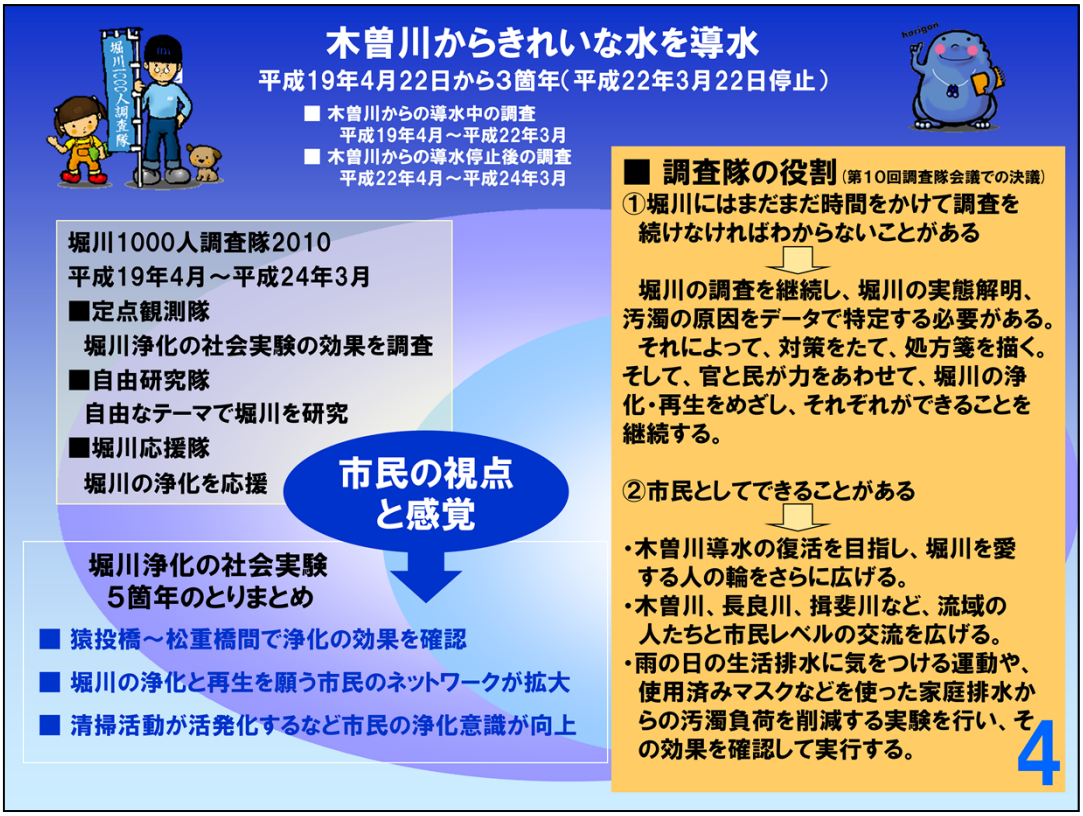
堀川1000人調査隊2010は、第12ステージ（平成24年9月～12月）の調査を実施するとともに、堀川ウォーターマジックフェスティバルの堀川水上バスの運行にあわせて、水上交通による堀川の変化を調べるという目的で第2回の堀川一斉調査を企画して、実施しました。

堀川は、流域面積が51.9km²、延長が16.2kmの人工河川です。

堀川は河口から13.62kmの猿投橋までは潮の干満の影響を受けています。干満の差は大潮の時に2m以上になる時もあります。

堀川は平地にある川です。流域に山地はありません。したがって、雨が降っていない時は自然界から流れ出てくる水はほとんどありません。

堀川の主な水源は、水処理センターの処理水です。私たちが使っている水道水の水源は木曽川ですから、この処理水も本来は堀川の流域で生まれた水ではありません。



堀川１０００人調査隊２０１０は、堀川浄化の社会実験（平成19年4月～24年3月）で実施された木曽川からの導水による浄化効果を市民の視点と感覚で調べることを目的に結成されました。

調査隊は定点観測隊、自由研究隊、応援隊の3つのカテゴリーで、浄化の効果の確認、市民の浄化活動の継続と盛り上げ、流域全体の浄化意識の向上をめざして活動しています。

定点観測隊は、市民の視点と感覚で“水の汚れ”、“水の透明感”、“色”、“あわ”、“臭い”、“ごみ”、“生き物”などを調べています。

木曽川からの導水は、平成１９年４月から平成２２年３月の3箇年で行われました。その導水量は毎秒0.4立方メートルでした。これは１秒間に一般の家庭のお風呂の浴槽２杯分程度の量です。

その後、2箇年の導水停止後の調査が実施され、平成２４年３月で5箇年の堀川浄化の社会実験は終わりました。

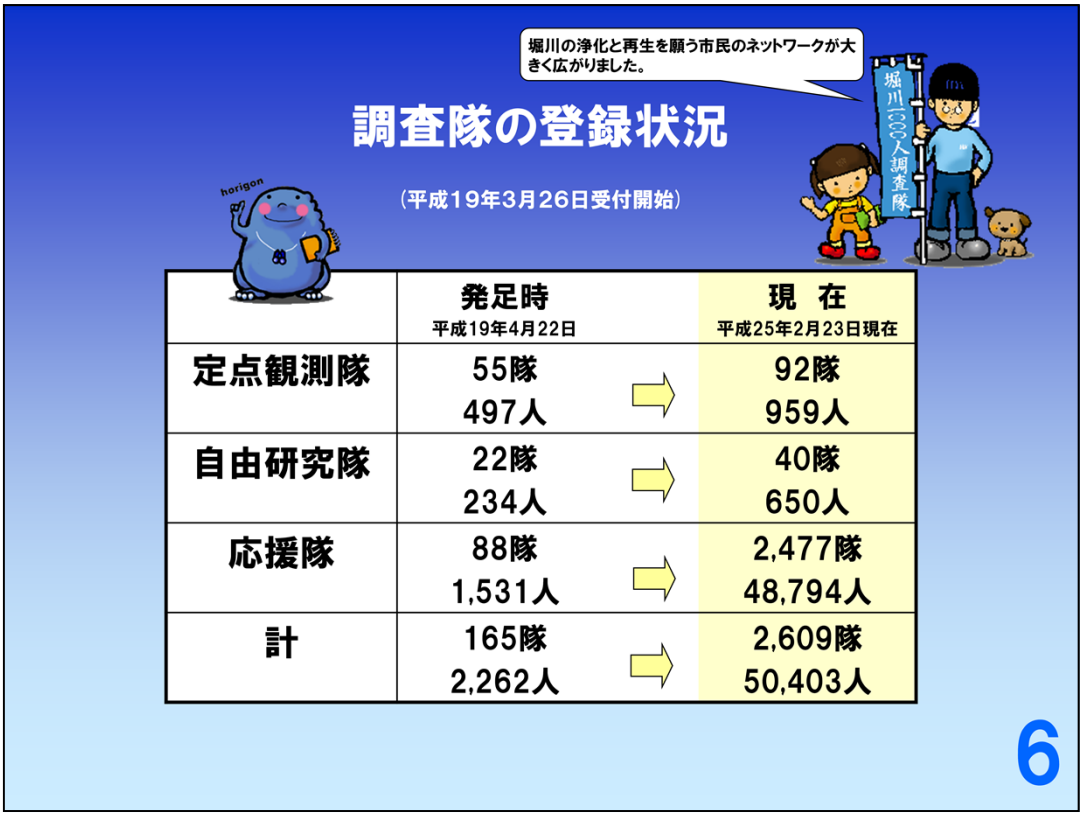
この社会実験で堀川の猿投橋から下流区間（感潮区間）は、潮の干満によって、水域の様子が時々刻々と変化していることがわかってきました。また、定点観測隊がたくさんの観測（いろいろな場所、潮の状態、時間帯に観測）をすることで、堀川の平均的な状態をとらえられることができ、その変化の傾向がとらえられることがわかりました。そして、堀川浄化の社会実験の５箇年では、木曽川からの導水による水質改善の範囲が概ね“猿投橋～松重橋”間であったことを確認しました。また、この活動の期間にごみ（人工ごみ：プラスチック系など）が減少したことを確認しました。清掃活動が活発化するなど、市民の意識が変化してきたものと考えられます。

（堀川浄化の社会実験　５箇年のとりまとめ）

■猿投橋～松重橋間で木曽川からの導水による浄化の効果を確認

■堀川の浄化と再生を願う市民のネットワークが拡大

■清掃活動が活発化するなど市民の浄化意識が向上



	発足時 平成19年4月22日		現　在 平成25年2月23日現在
定点観測隊	55隊 497人	⇨	92隊 959人
自由研究隊	22隊 234人	⇨	40隊 650人
応援隊	88隊 1,531人	⇨	2,477隊 48,794人
計	165隊 2,262人	⇨	2,609隊 50,403人

現在の調査隊の登録状況（平成25年2月23日現在）は、定点観測隊が92隊、自由研究隊が40隊、応援隊が2,477隊の計2,609隊、50,403人です。発足時が165隊、2,262人でしたので、堀川の浄化と再生を願う市民のネットワークが大きく広がったことがわかります。

木曽川からの導水が停止（平成22年3月）した後は、新たな水質改善施策として、名城水処理センターに高度処理が導入（平成22年5月）され、堀川右岸雨水滞水池が供用を開始（平成22年9月）しました。また、新たな水源として、守山水処理センターの下水再生水の活用が開始（平成23年8月）されました。

堀川の水質は、木曽川からの導水が停止した直後の第7ステージ（平成22年4月～6月）に悪化しました。その後、第12ステージ（平成24年9月～12月）に“あわ”と“におい”がやや悪化しましたが、全般的には導水停止後に改善の傾向が見られています。これは新たな水質改善施策が実施されたことによる効果と考えられます。

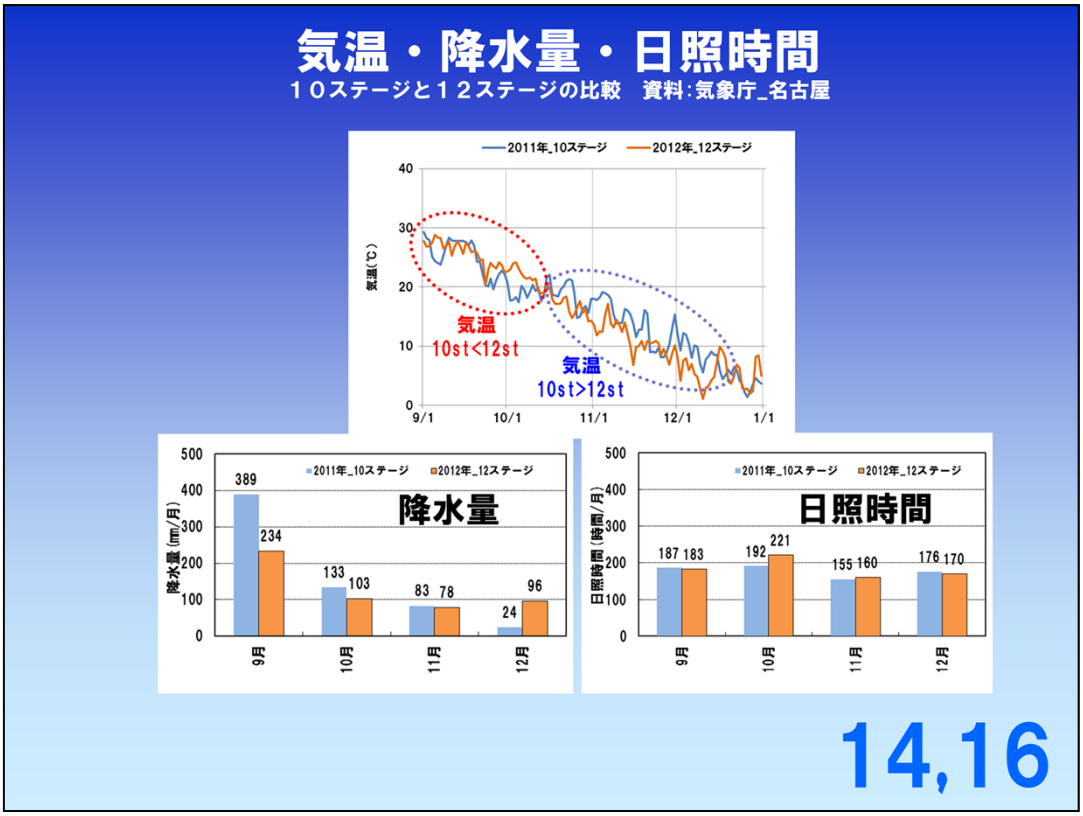
第11ステージでは平成24年5月21日の金環日食にあわせて、大潮時の一斉調査（第1回堀川一斉調査）を行いました。この結果、以下のことが確認されました。そして、今までの調査隊活動で得られたデータと知見をもとに、堀川における赤潮と青潮の発生メカニズムと堀川で貧酸素水塊が形成されるときの状況について、その一端を紐解きました。

- ■ 名古屋港の潮位に連動して流れの向きが変化し、大潮時には城北橋でも上流向きの流れが発生
- ■ 大潮の上げ潮時には、塩水が強い流れになって上流に押し上げられ、潮の先端部分で塩水の塊と淡水の塊が正面衝突して潮目の状態になる
- ■ 中・下流域（錦橋～紀左ヱ門橋間）では、上げ潮時に赤潮の状態であった

定点観測隊の活動の状況について説明します。定点観測隊は、第12ステージ終了までの間に2,881回の観測を実施しました。これまでの調査で堀川の猿投橋から下流区間（感潮区間）は、潮の干満によって、水域の様子が時々刻々と変化していることがわかってきました。また、定点観測隊がたくさんの観測（いろいろな場所、潮の状態、時間帯に観測）をすることで、市民の視点と感覚で堀川の水質の平均的な状態をとらえられることができ、その変化の傾向がとらえられることがわかりました。

第12ステージでは平成24年10月25日～29日の間で水上交通による堀川の変化を調べるために一斉調査（第2回堀川一斉調査）を行いました。この結果、以下のことが確認されました。そして、これらの事実関係から定期的に船が運行された時に堀川でどのような変化が生じるのかをより現実的に考えるための知見が得られました。

- ■ 水上バスが運行されると水域が撹拌され、川底の表面にある灰色のほこりのようなもの（浮泥）とその下の黒い泥（以下、ヘドロ）が巻き上がり、水が濃い灰色に濁った
- ■ 船が航行した直後には、ヘドロの中に生成されたメタンや硫化水素などの気体がヘドロとともに巻き上げられ、開放された気体は多くの泡となって水面に浮かび上がった



第12ステージの9月～12月の気象は、9月と10月に好天が多く、気温が高く、雨が少ない状況でした。一方、12月になると冬型の気圧配置が続いたため気温が低くなり、12月10日には積雪を観測しました。

■気温

・第12ステージの気温は、9月と10月が平年値よりもやや高く、11月と12月が低かった。

■降水量

・第12ステージの降水量は、9月と10月が平年値よりもやや少なく、12月が多かった。11月は平年値程度でした。

■日照時間

・第12ステージの日照時間は、9月と10月が平均値よりも長く、11月と12月は平年値程度でした。

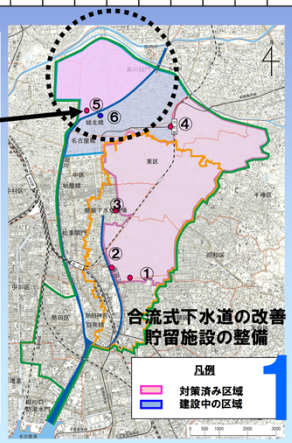
主な水質改善施策の実施状況

実施施策	平成19年度		平成20年度		平成21年度		平成22年度		平成23年度		平成24年度	
	1st.	2st.	3st.	4st.	5st.	6st.	7st.	8st.	9st.	10st.	11st.	12st
木曽川からの導水（0.4m^3/s）	●	●	●	●	●	●						
庄内川からの導水の増量（＋0.4m^3/s）							●	●				
名城水処理センター高度処理の導入							●	●	●	●	●	●
堀川右岸雨水滞水池の供用							●	●	●	●	●	●
守山水処理センターの下水再生水の活用（0.046m^3/s）									●	●	●	●

木曽川からの導水が停止した後に新たに稼動した施設

名城水処理センター・高度処理
処理方法　標準活性汚泥法＋急速ろ過
供用開始　平成22年5月

堀川右岸雨水滞水池
貯留量　13,000m^3
対象面積　633ha
供用開始　平成22年9月



17

堀川の流域では、水環境の改善のためにヘドロの浚渫や水源の確保や合流式下水道の改善など、様々な取り組みが実施されてきました。

木曽川からの導水が停止した後の平成22年度には、名城水処理センターの高度処理や堀川右岸雨水滞水池が稼動しました。

木曽川からの導水が停止した後に新たに稼動した施設

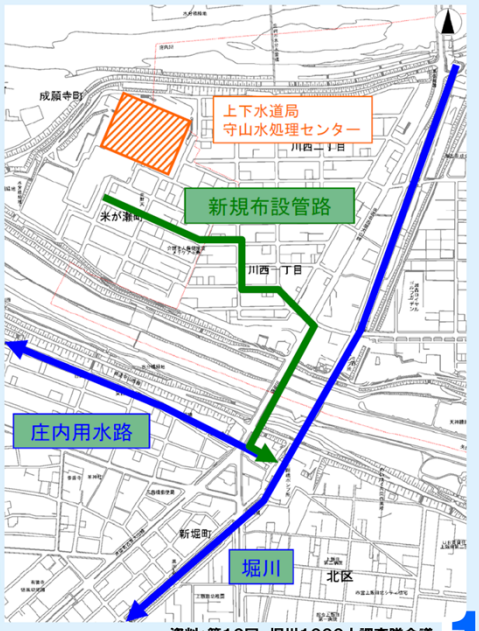
■新たな水源の確保

◆下水再生水の活用

守山水処理センターで、
膜ろ過された下水再生水を活用し、
日最大4,000m³堀川へ通水する。

通水開始　平成23年8月

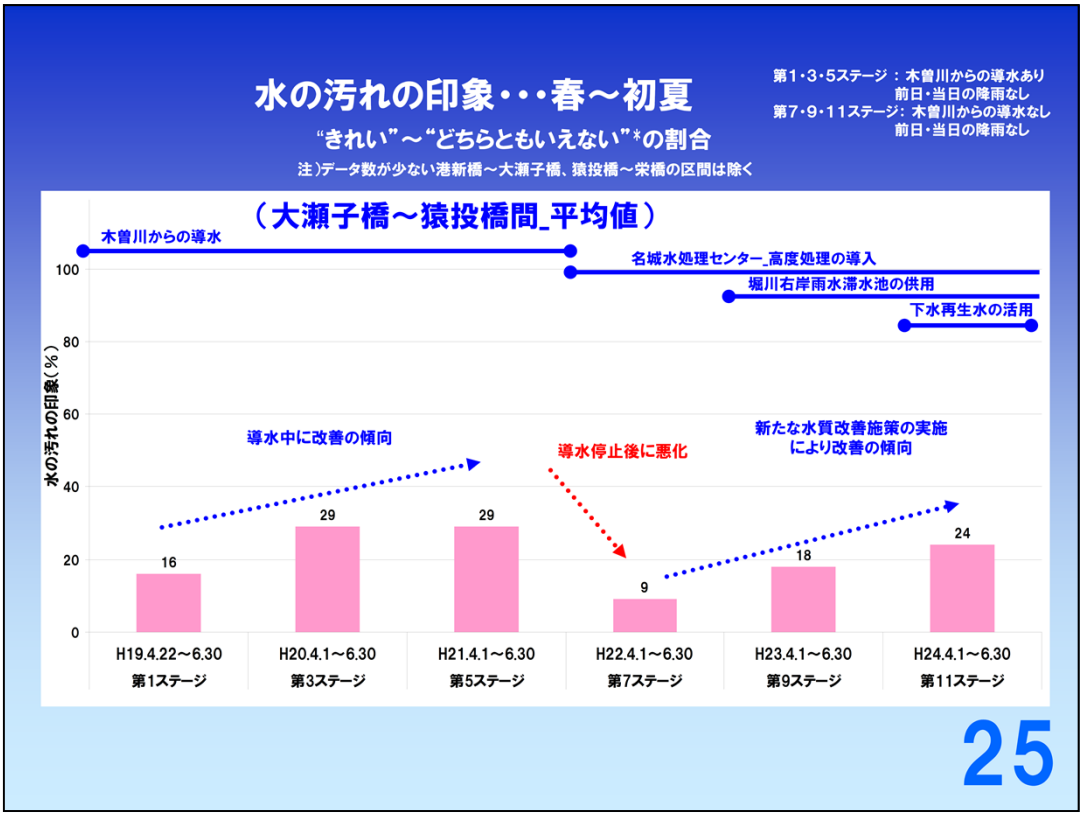
※通水期間は、概ね灌漑期（4月～10月）
（庄内用水路に通水を行う期間（11月～3月）を除く）



資料：第10回　堀川1000人調査隊会議

18

平成23年度には守山水処理センターで膜ろ過された下水再生水の堀川への通水がはじめられました。なお、この通水期間は概ねかんがい期の4月～10月です。



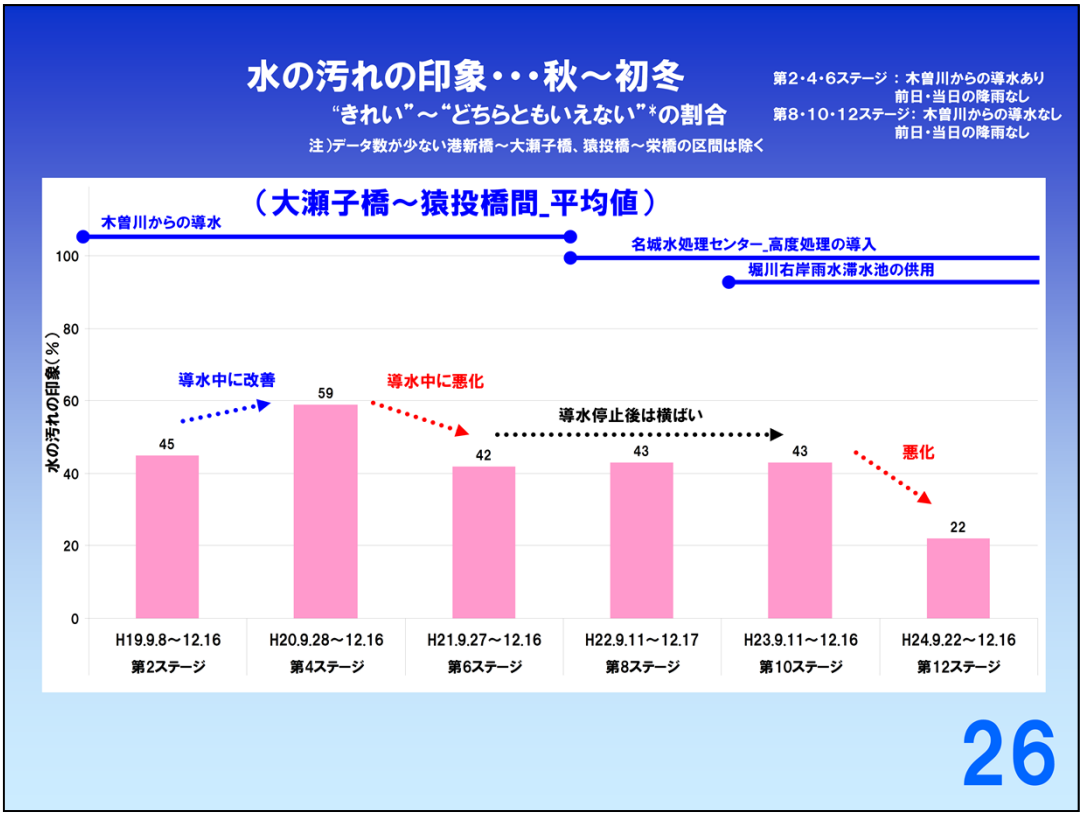
春から初夏の水の汚れの印象の変化について説明をします。

“きれい”～“どちらともいえない”の割合を市民の許容範囲として整理をしました。

左から第１ステージから第１１ステージの順に並んでいます。

導水中の第１ステージから第５ステージは、猿投橋～松重橋間で水の汚れの印象が改善（“きれい”～“どちらともいえない”の割合が増加）しました。

導水停止後の第７ステージは、水の汚れの印象が悪化（“きれい”～“どちらともいえない”の割合が減少）しました。しかし、その後の水の汚れの印象は、改善の傾向が見られます。これは新たな水質改善施策が実施されたことによる効果と考えられます。



秋から初冬の水の汚れの印象の変化について説明をします。

“きれい”～“どちらともいえない”の割合を市民の許容範囲として整理をしました。

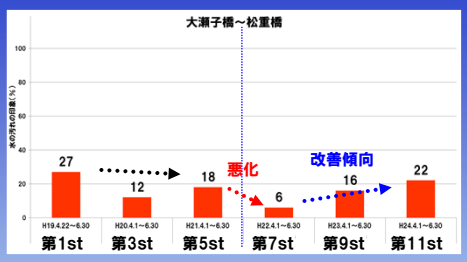
左から第２ステージから第１２ステージの順に並んでいます。

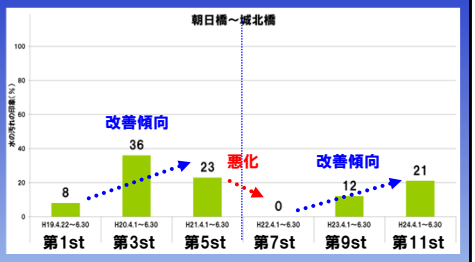
導水中の第４ステージに改善の傾向が見られたが第６ステージには悪化しました。導水停止後は第10ステージまで横ばいでしたが、第１２ステージで悪化に転じました。

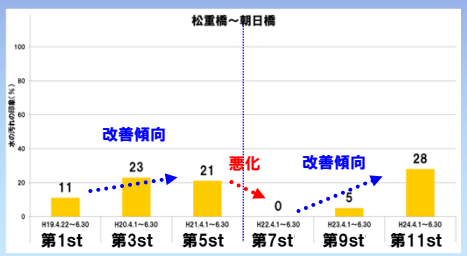
水の汚れの印象・・・春～初夏

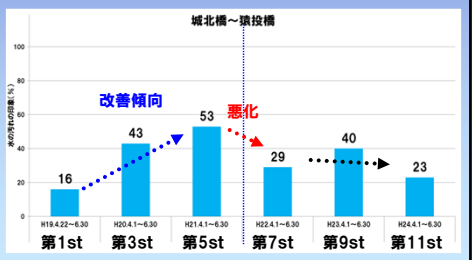
“きれい”～“どちらともいえない”*の割合

第1・3・5ステージ：木曽川からの導水あり
前日・当日の降雨なし
第7・9・11ステージ：木曽川からの導水なし
前日・当日の降雨なし







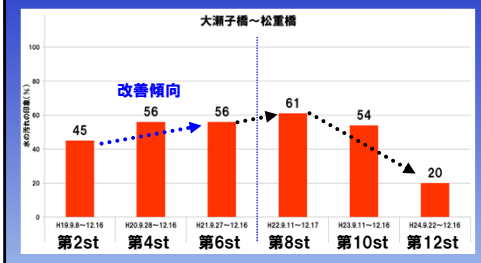


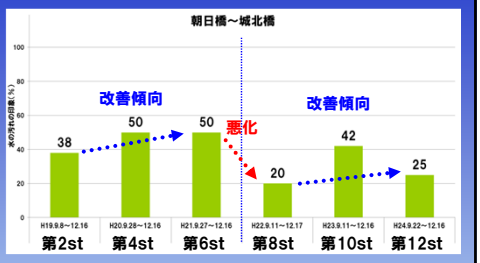
28

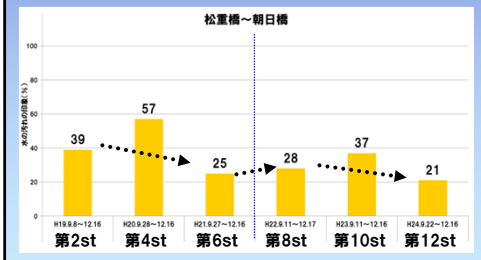
水の汚れの印象・・・秋～初冬

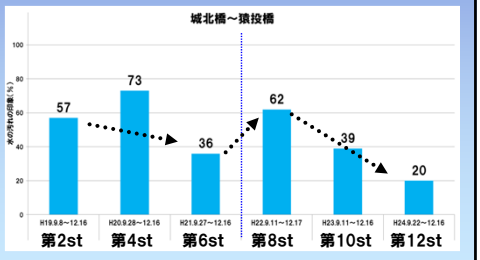
“きれい”～“どちらともいえない”*の割合

第2・4・6ステージ：木曽川からの導水あり
前日・当日の降雨なし
第8・10・12ステージ：木曽川からの導水なし
前日・当日の降雨なし

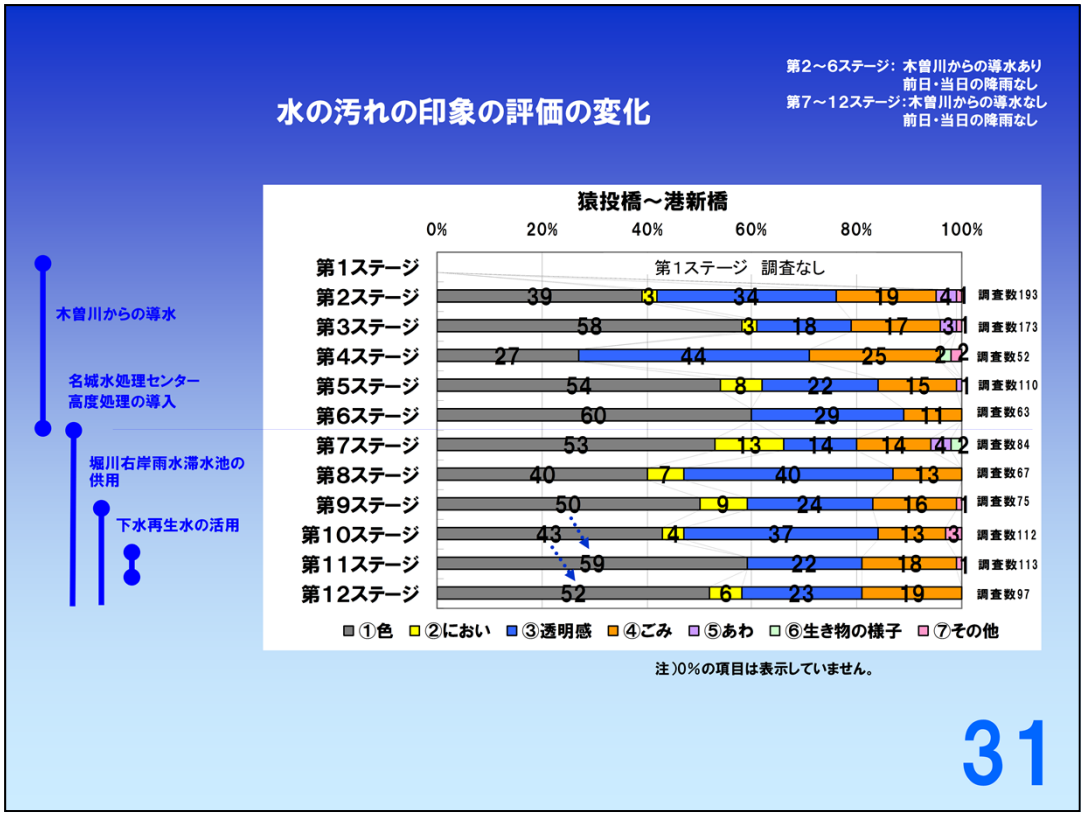








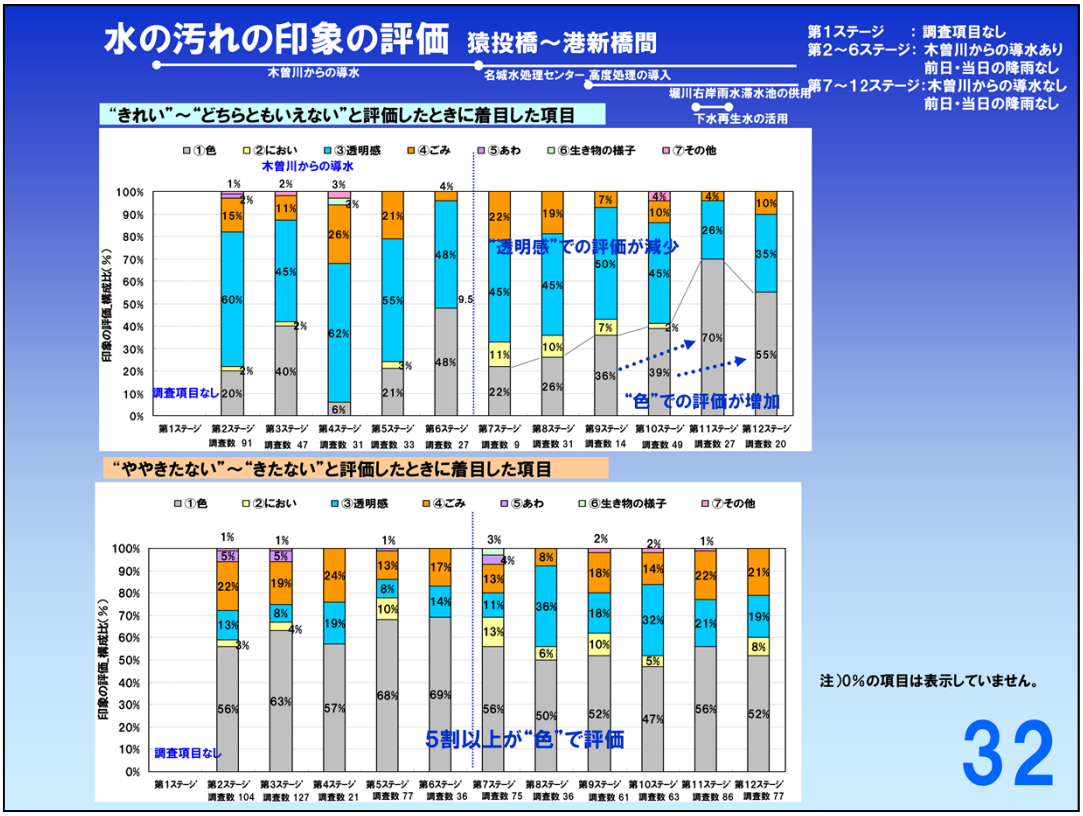
30



水の汚れの印象の評価の変化について説明をします。

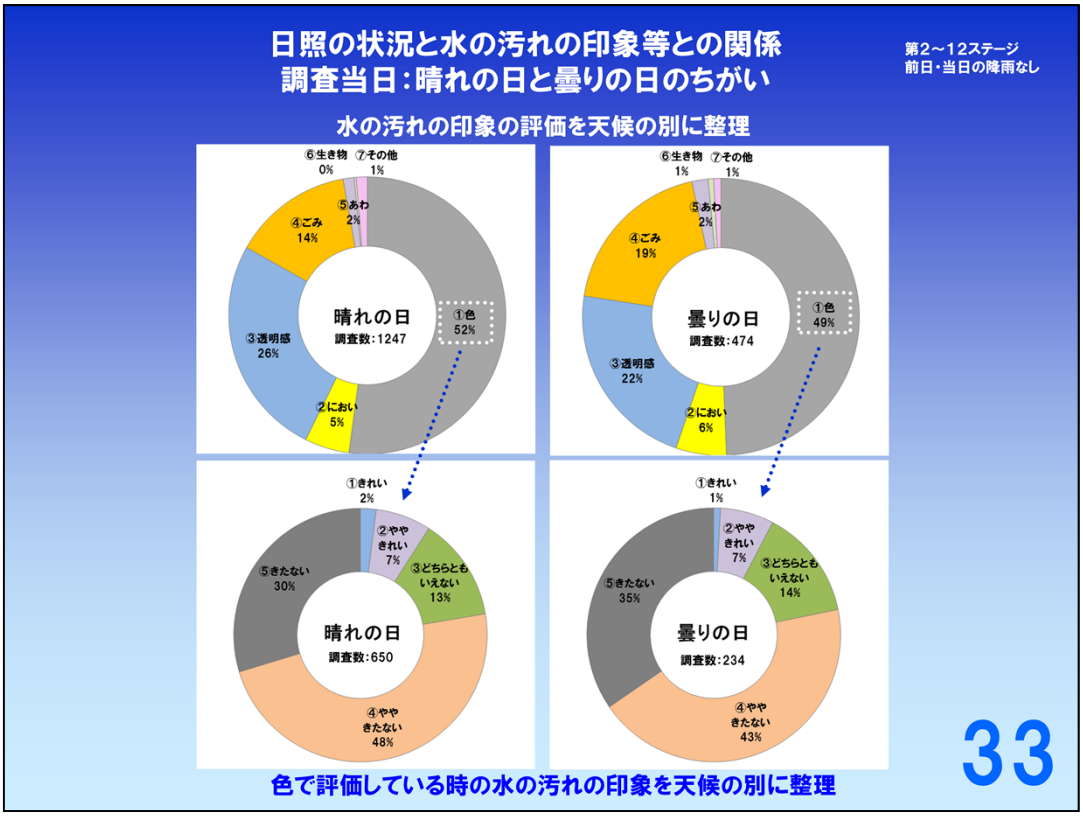
水の汚れの印象の評価で割合が多い項目は、“色”と“透視度”と“ごみ”でした。

第9ステージ以降に色での評価が増加しました。新たな水質改善施策が実施されたことによる変化かもしれません。



“きれい”～“どちらともいえない”と評価したときに着目した項目は、透明感の評価が減少し、色での評価が増加しています。特に第11ステージと12ステージで色での評価の割合が多くなりました。

“ややきたない”～“きたない”と評価したときに着目した項目は、5割以上が“色”で評価されていました。

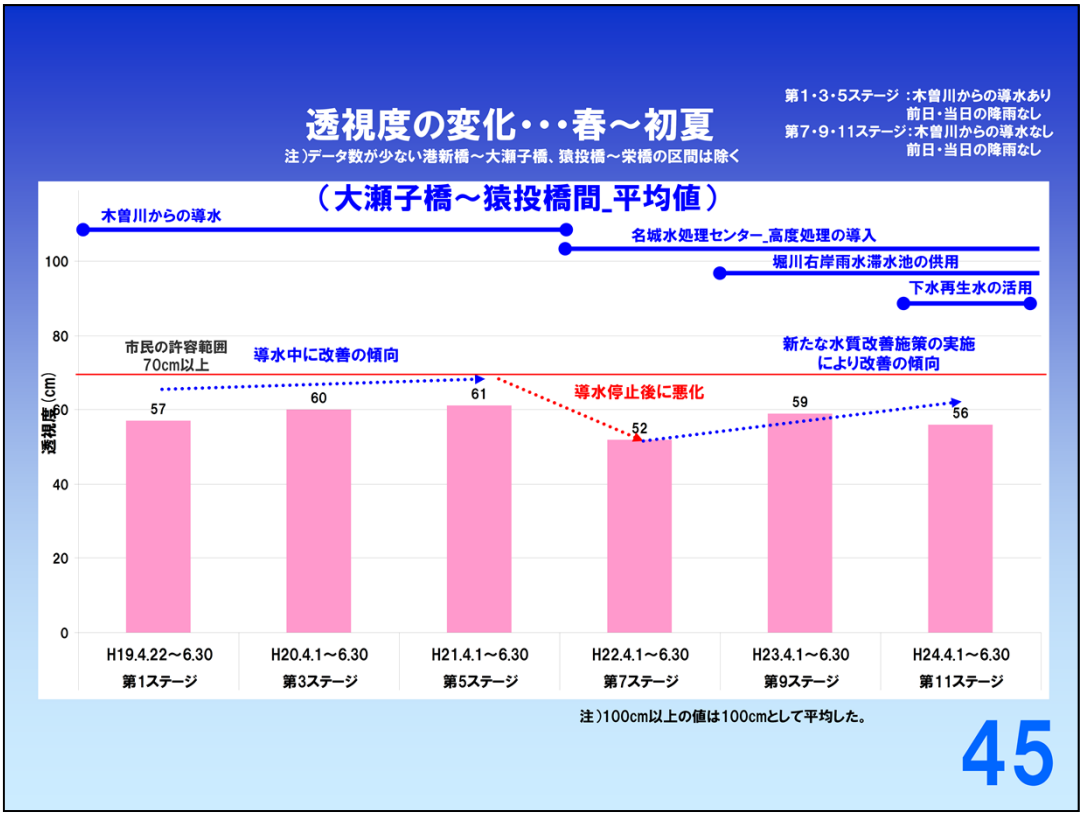


堀川の色は、同日でも日照の状態（晴れと曇り）によって異なるということが確認されています。そこで日照の状態（晴れと曇り）によって、水の汚れの印象とその評価がどのように変化しているのかを確認してみました。

まず、日照の状況と水の汚れの印象の関係を調べてみました。具体的には、水の汚れの印象の評価を天候の別に整理をしてみました。その結果、晴れの日も曇りの日も“色”での評価の割合が約5割をしめていました。曇りの日に“色”と“透明感”での評価がやや少なくなり、“ごみ”での評価が多くなりましたが、大きなちがいはありませんでした。

次に色で評価している時の水の汚れの印象を天候の別に整理してみました。その結果、曇りの日に“きたない”がやや多くなりましたが、大きなちがいはありませんでした。

以上の結果から水の汚れの印象とその評価の割合は、晴れの日と曇りの日で大きなちがいが確認されませんでした。（＝日照条件による水の汚れの印象への影響は明確ではありません）



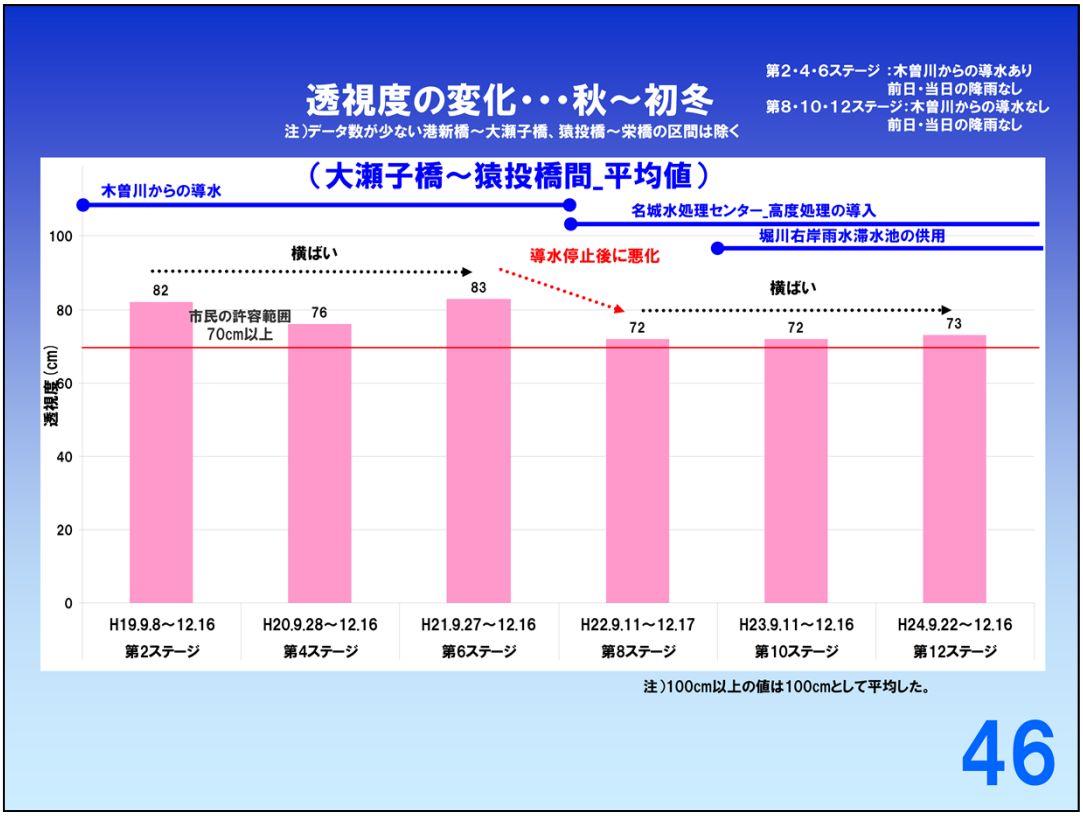
春から初夏の透視度の変化について説明をします。

導水中の第１ステージから第５ステージは、透視度が改善しました。

導水停止直後の第７ステージは、透視度が悪化しました。しかし、その後の透視度は改善の傾向が見られました。

これは水の汚れの印象の変化と同様の傾向です。これも新たな水質改善施策が実施されたことによる効果と考えられます。

しかし、春～初夏の透視度は、市民の許容範囲である70cmを満足していませんでした。



夏から初冬の透視度の変化について説明をします。

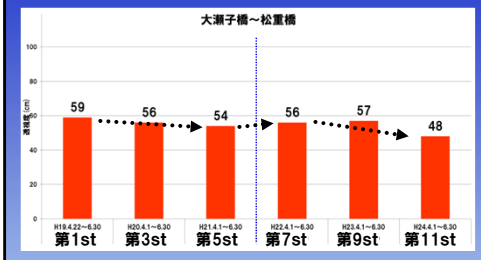
導水中の第2ステージから第6ステージは、透視度が横ばいでした。

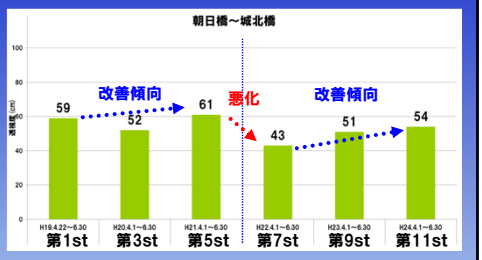
導水停止直後の第8ステージには透視度が悪化しました。しかし、その後は横ばいの状態です。

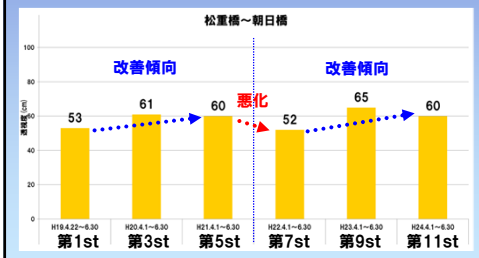
秋～初冬の透視度は、市民の許容範囲である70cmを満足していました。

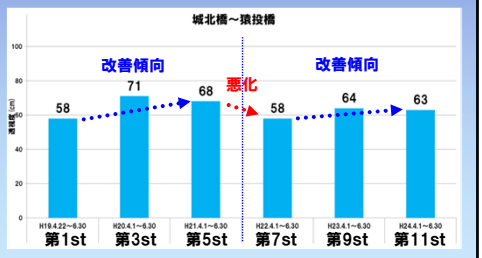
透視度の変化・・・春～初夏

第1・3・5ステージ ：木曽川からの導水あり
前日・当日の降雨なし
第7・9・11ステージ：木曽川からの導水なし
前日・当日の降雨なし





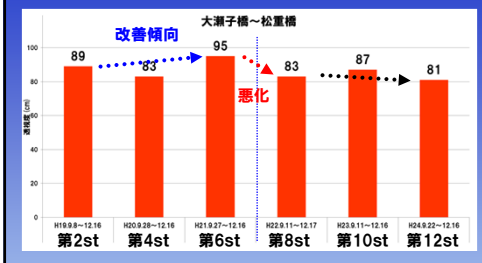


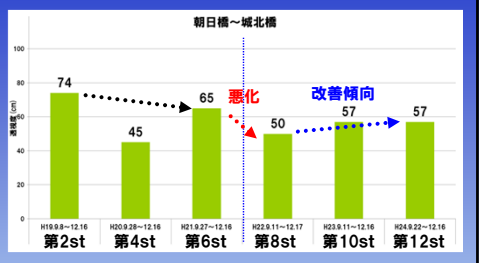


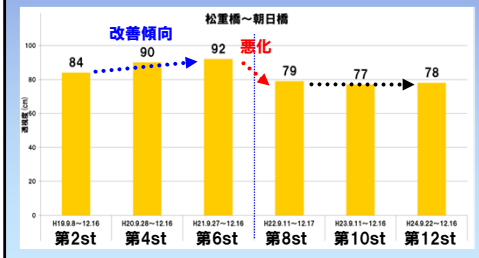
48

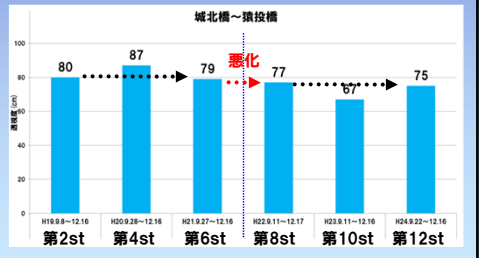
透視度の変化・・・秋～初冬

第2・4・6ステージ ：木曽川からの導水あり
前日・当日の降雨なし
第8・10・12ステージ：木曽川からの導水なし
前日・当日の降雨なし

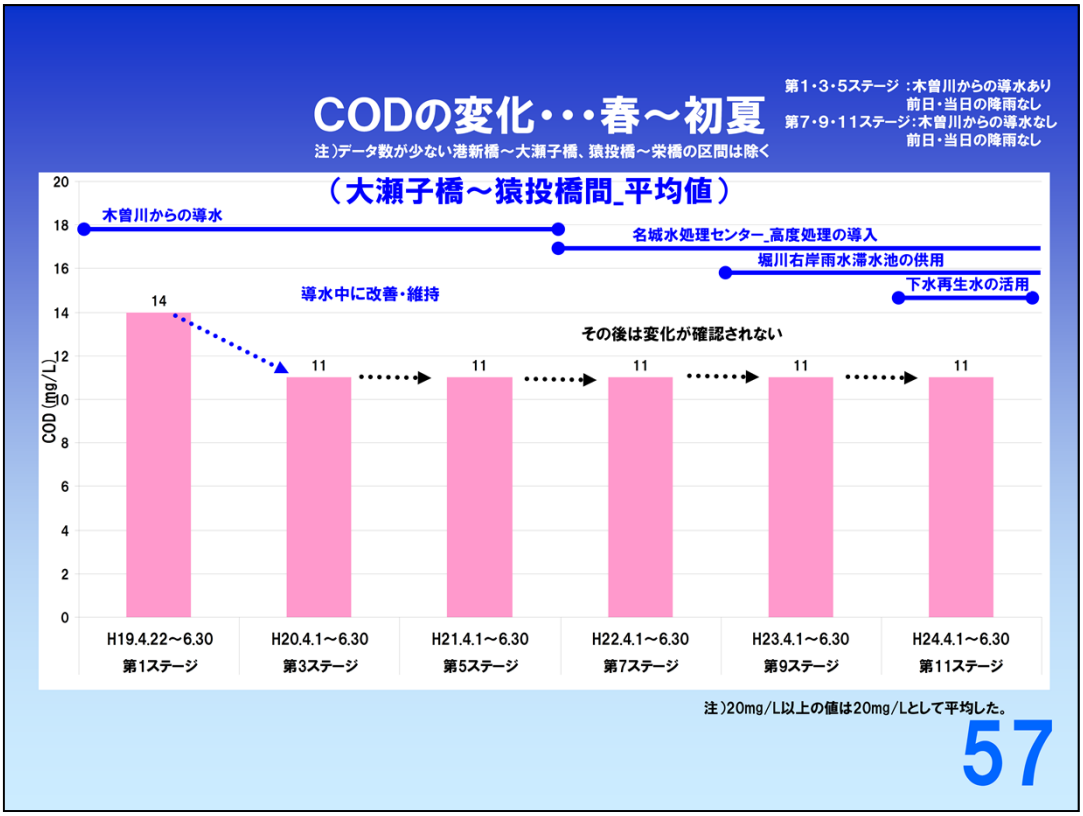






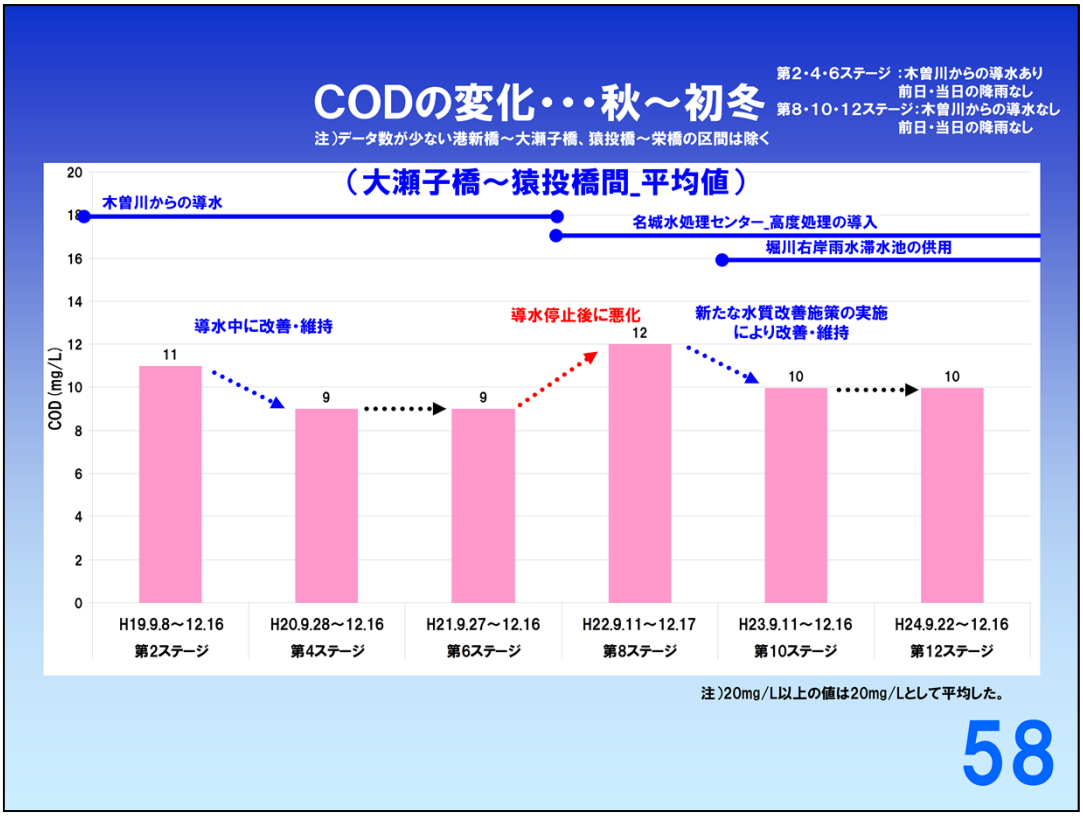


50



春から初夏のCODの変化について説明をします。

導水中に改善し、その後は変化が確認されませんでした。

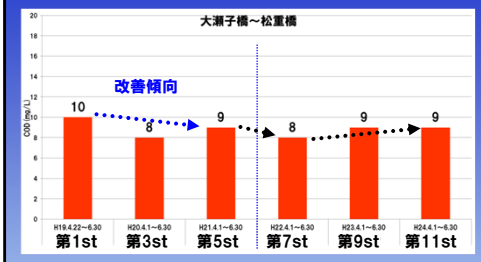


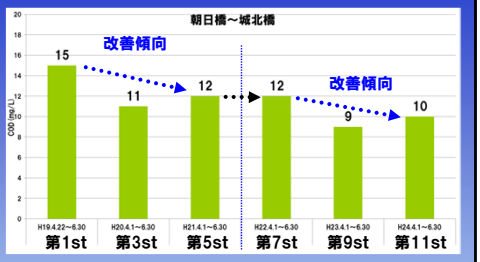
秋から初冬のCODの変化について説明をします。

導水中に改善・維持し、導水停止後に悪化しました。その後は新たな水質改善施策の実施により改善・維持されました。

CODの変化・・・春～初夏

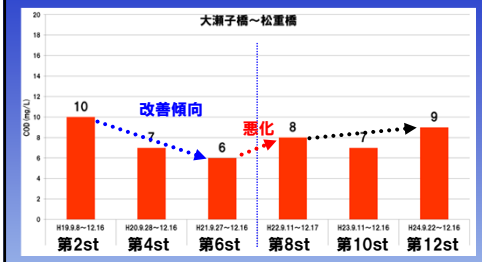
第1・3・5ステージ ：木曽川からの導水あり
前日・当日の降雨なし
第7・9・11ステージ：木曽川からの導水なし
前日・当日の降雨なし

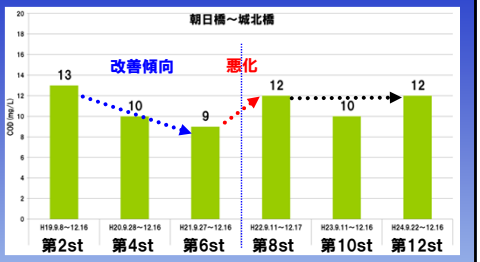


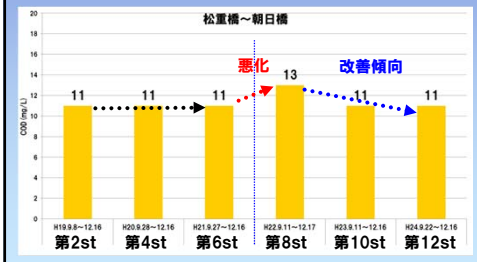


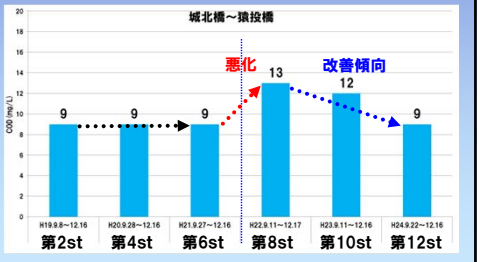
CODの変化・・・秋～初冬

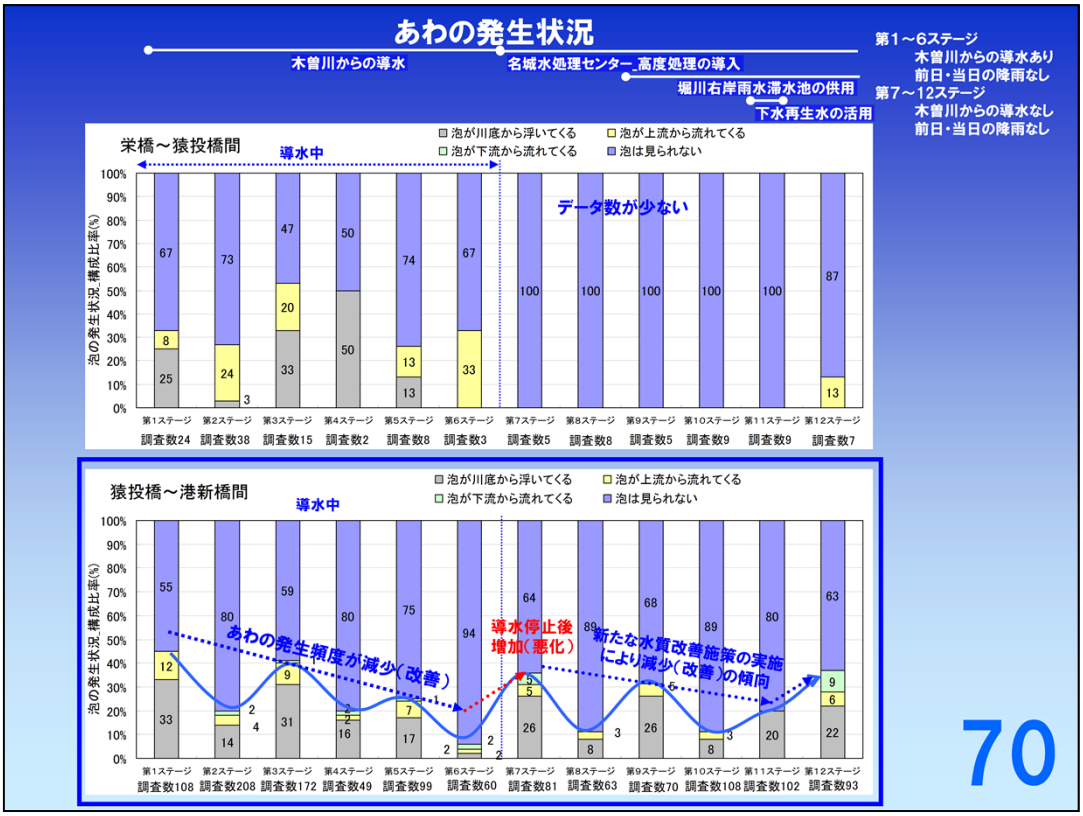
第1・3・5ステージ ：木曽川からの導水あり
前日・当日の降雨なし
第7・9・11ステージ：木曽川からの導水なし
前日・当日の降雨なし









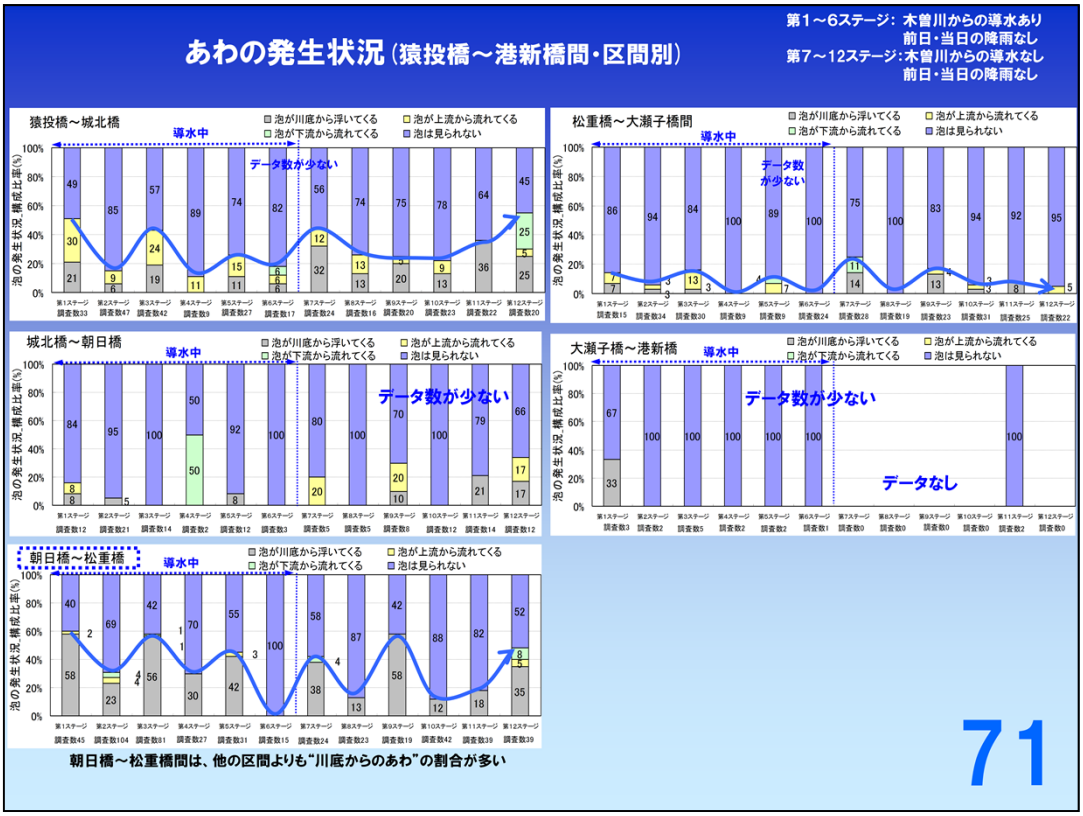


あわの発生状況の変化について説明をします。

導水中にあわの発生頻度が減少（改善）しました。

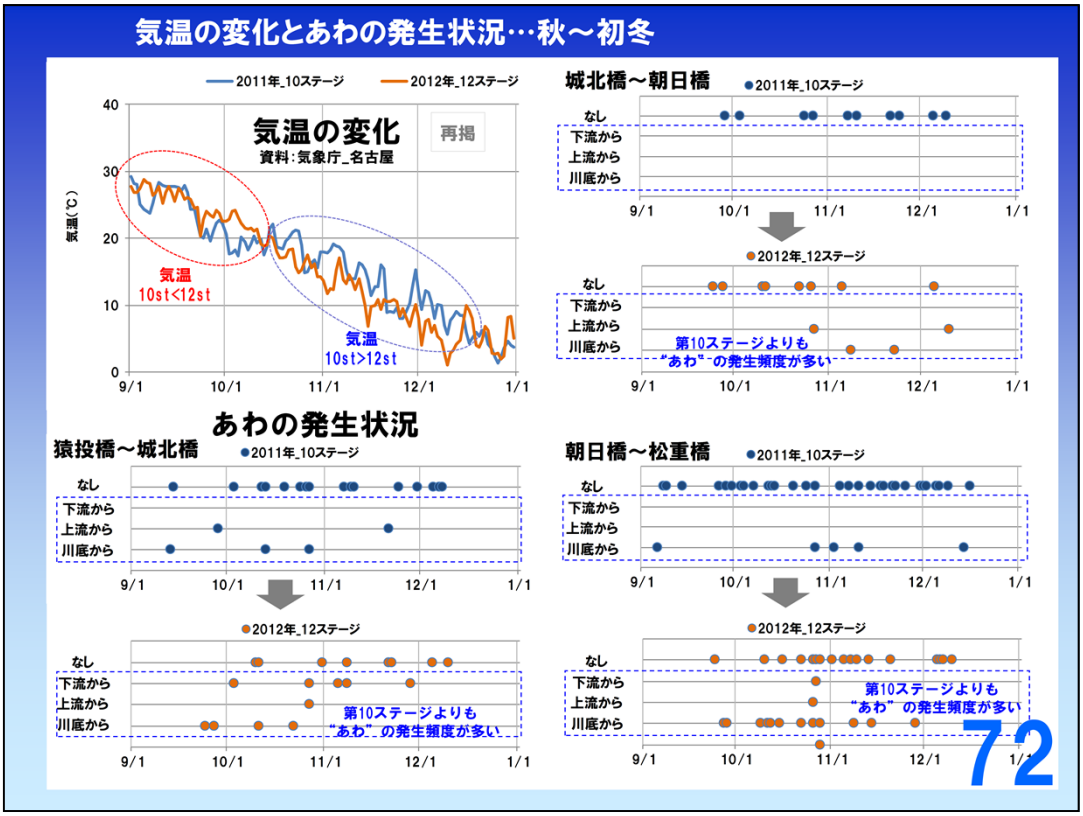
導水停止直後の第７ステージは、あわが増加（悪化）しました。しかし、その後のあわは減少（改善）の傾向がみられました。

これは水の汚れの印象の変化と透視度と同様の傾向です。これも新たな水質改善施策が実施されたことによる効果と考えられます。しかし、第１２ステージでは悪化しました。



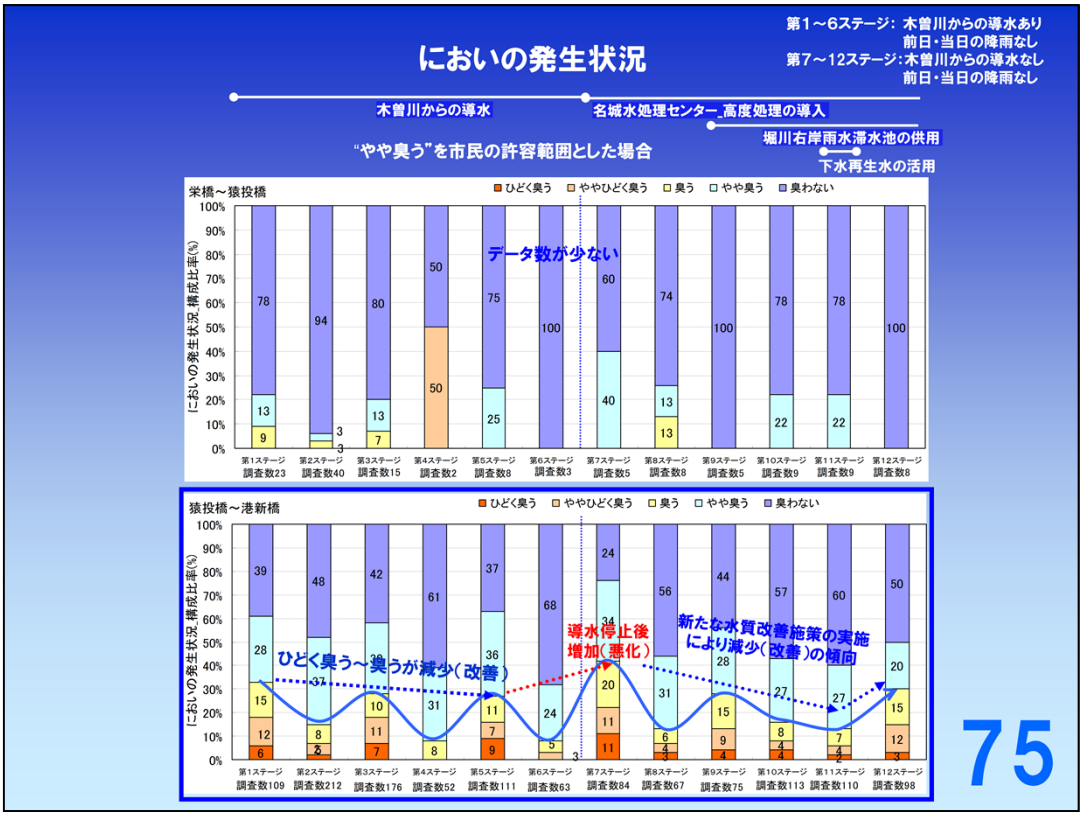
区間別に川底からのあわの発生状況を整理してみました。

この結果、朝日橋～松重橋間は、他の区間よりも“川底からのあわ”の割合が多く見られました。



第12ステージであわの発生状況が悪化しました。そこで気温とあわの発生状況を整理してみました。

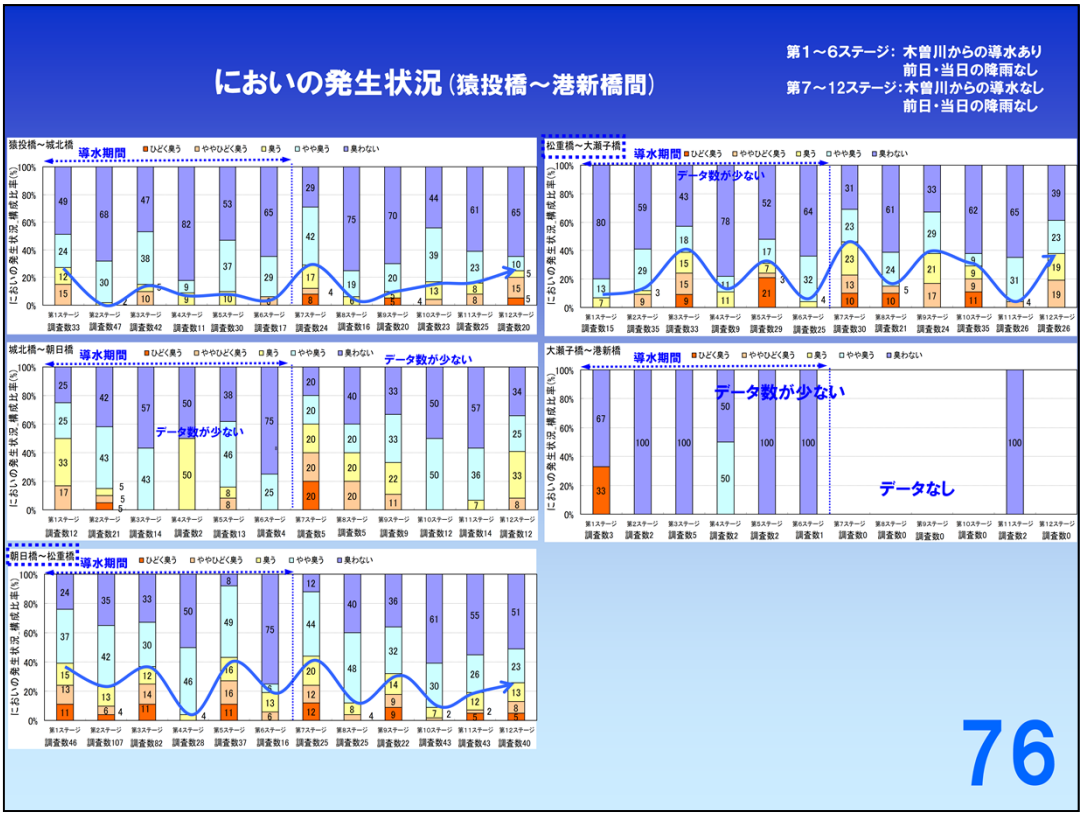
第12ステージにあわが多く発生したのは、9月と10月に平年よりも気温が高く、川底のヘドロの状態が良くなかったことが影響したのかもしれません。



においの発生状況の変化について説明をします。

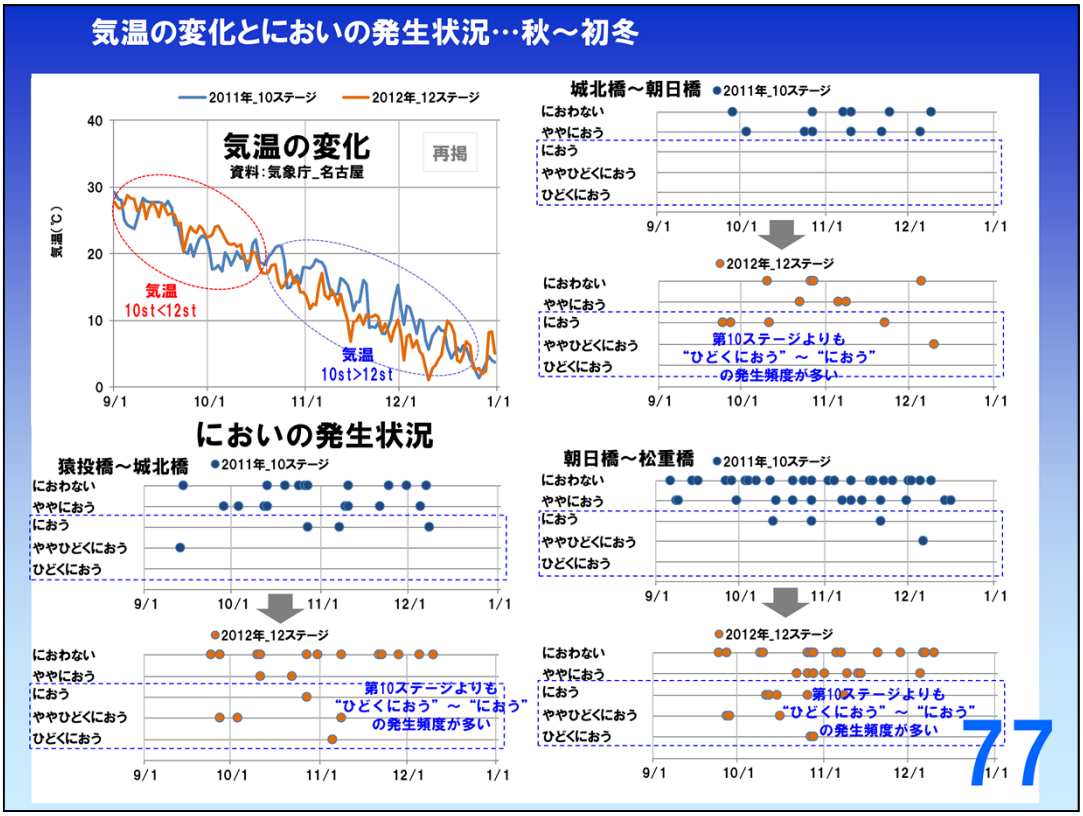
においは、“春～初夏（第1,3,5,7,9,11ステージ）”が“秋～初冬（第2,4,6,8,10,12ステージ）”より”ひどく臭う～臭う”が多くなっています。

導水中に”ひどく臭う～臭う” が減少しました。そして、導水停止直後の第7ステージに”ひどく臭う～臭う”が増加（悪化）しました。しかし、その後のにおいは減少（改善）の傾向がみられました。これは新たな水質改善施策が実施されたことによる効果と考えられます。しかし、第12ステージでにおいが増加しました。



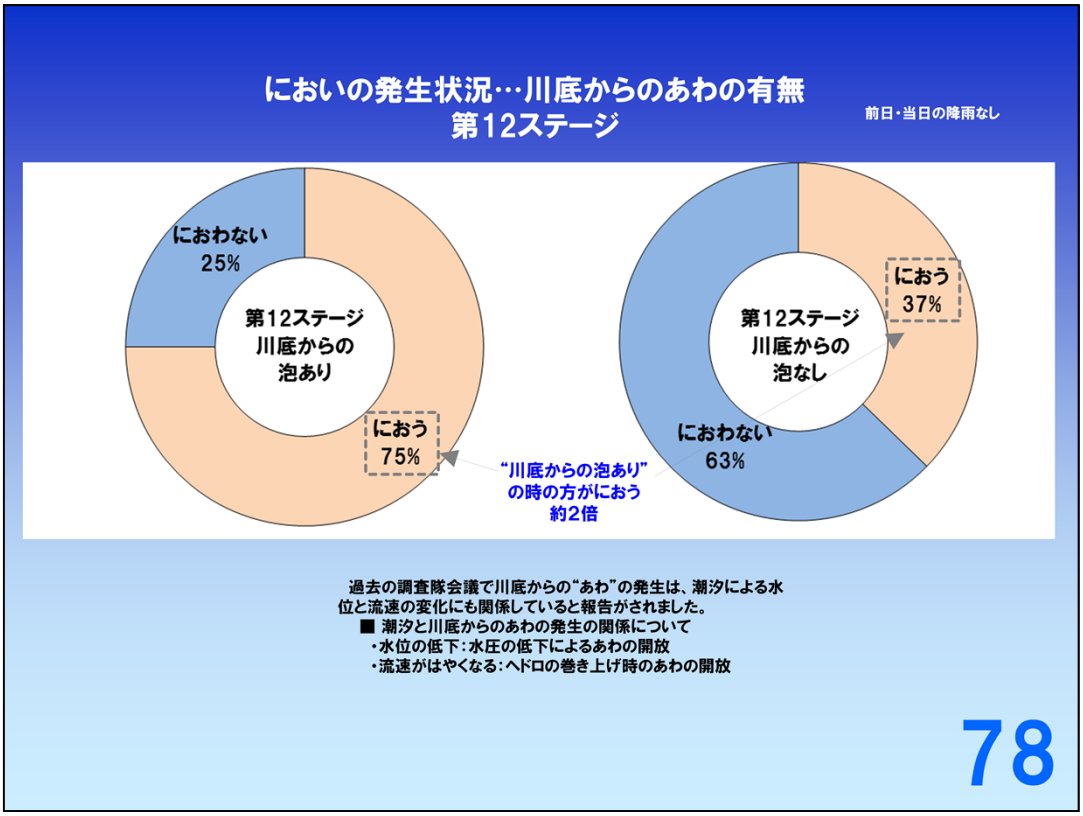
区間別ににおいの発生状況を整理してみました。

この結果、朝日橋～大瀬子間は、他の区間よりも“ひどく臭う～臭う”の割合が多く見られました。



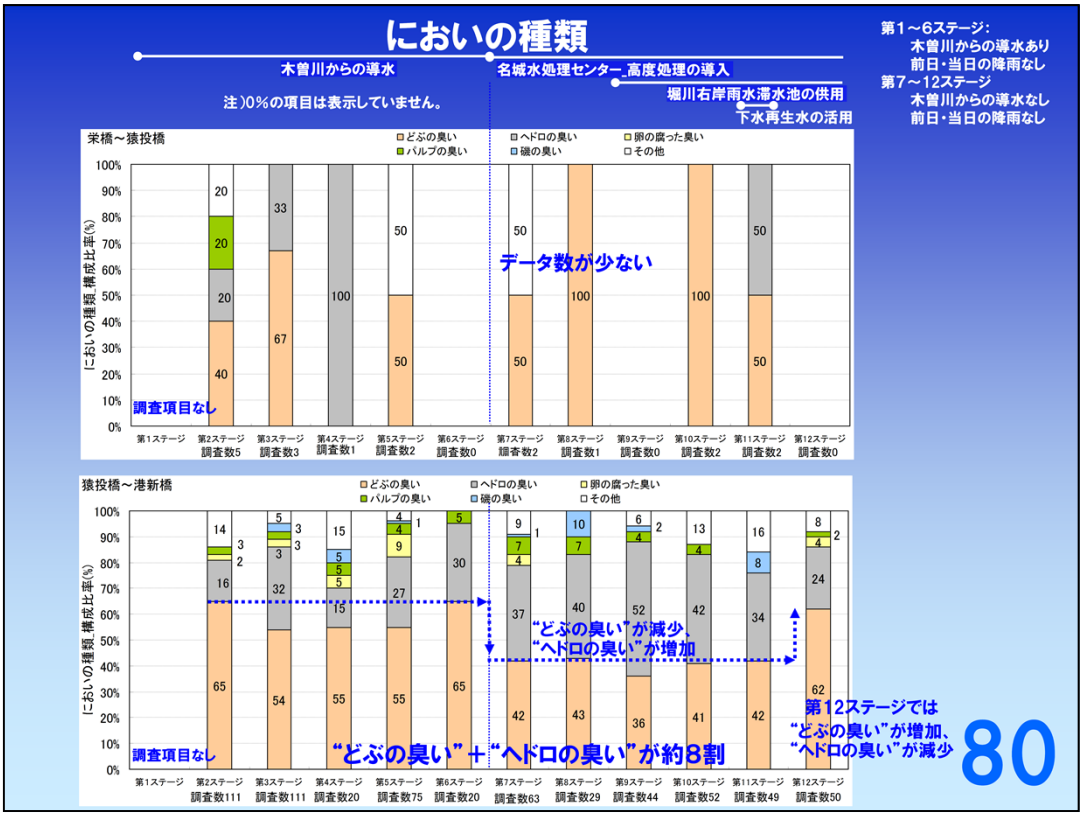
第12ステージで“ひどくにおう”～“におう”が多くなりました。そこで気温の変化とにおいの発生状況を整理してみました。

第12ステージに“ひどくにおう”～“におう”が多く発生したのは、9月と10月に平年よりも気温が高く、川底のヘドロの状態が良くなかったことが影響したのかもしれません。



川底からのあわの有無とにおいの発生状況の関係を整理してみました。

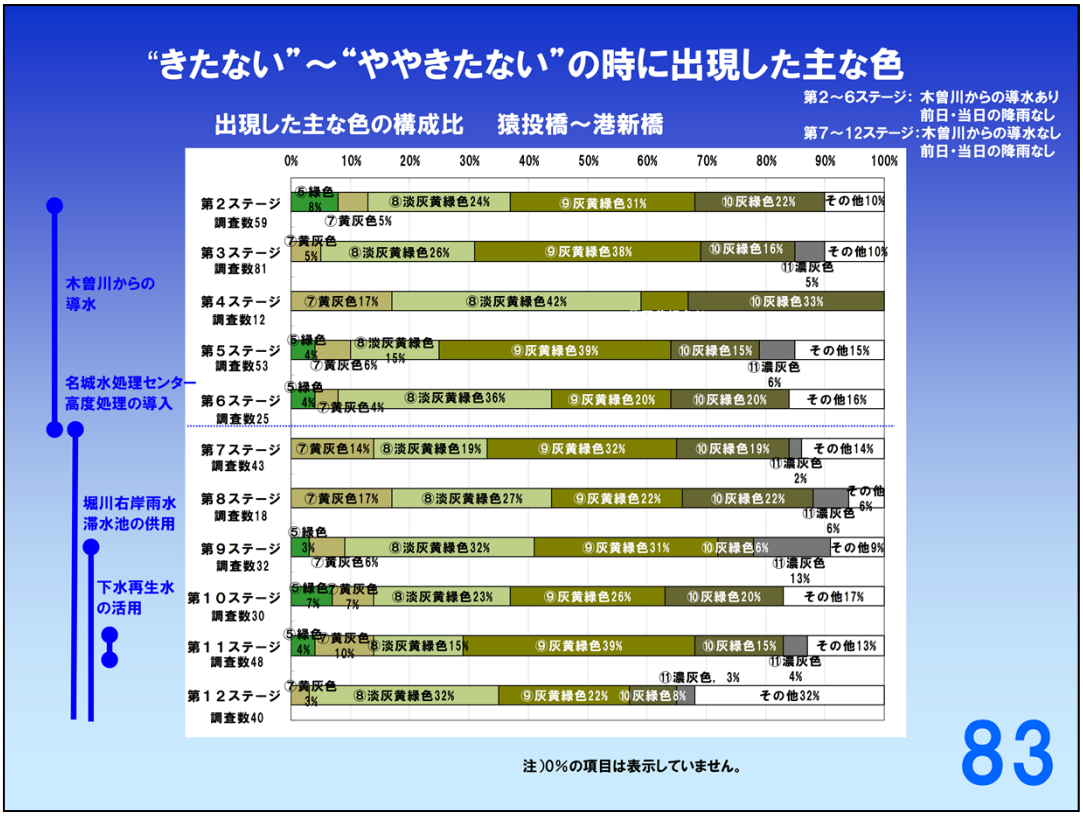
川底からあわがでているような状態の時には、“におい”が発生している割合が75％でした。川底から“あわ”がでていない時の約2倍の発生頻度でした。



猿投橋～港新橋間は“どぶの臭い”と“ヘドロの臭い”が約8割をしめています。

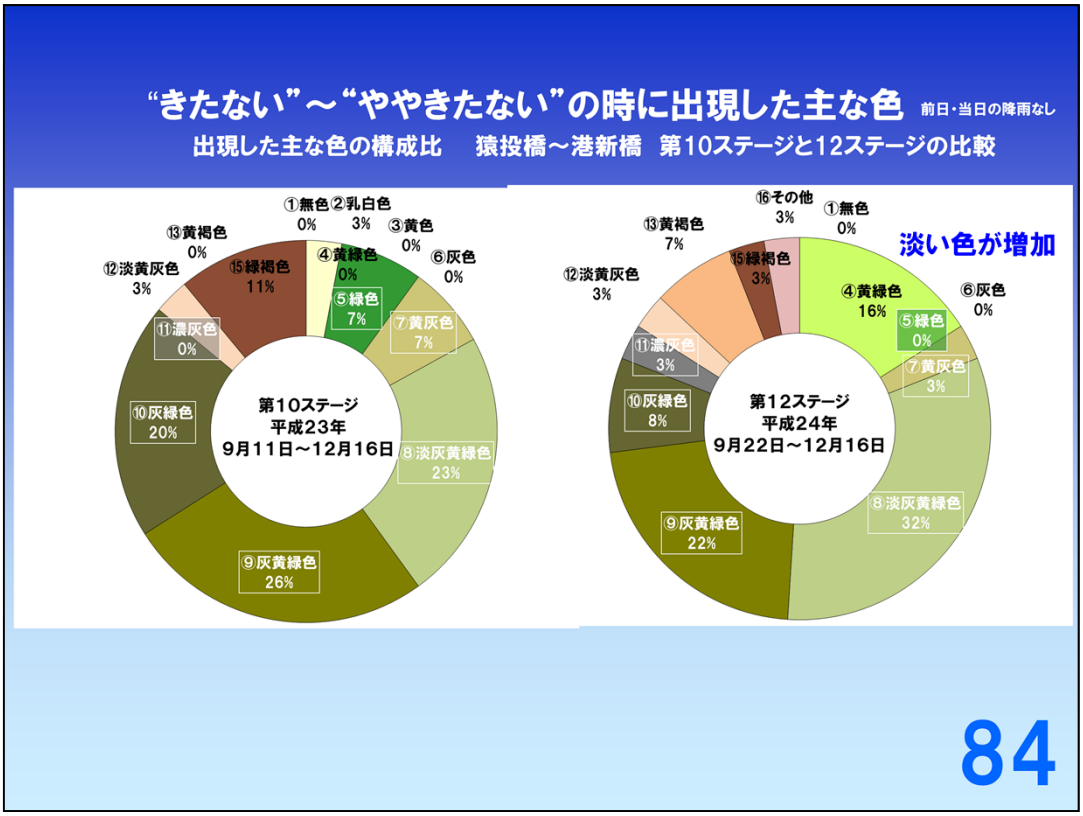
導水停止後は、猿投橋～港新橋間は、導水停止後に“どぶの臭い”が減り、“ヘドロの臭い”が増えました。

しかし、第12ステージでは “どぶの臭い”が増加、“ヘドロの臭い”が減少しました。



“きたない”～“ややきたない”の時に出現した主な色を整理しました。

この時の色は、主に“緑色”、“黄灰色”、“淡灰黄緑色”、“灰黄緑色”、“灰緑色”、“濃灰色”でした。淡灰黄緑色の時に腐卵臭がする時があります。その時は水域が青潮の状態になっている時です。 濃灰色は主にヘドロが巻きあがった時の色です。この色は、主に春～初夏のステージで見られます。



“きたない”～“ややきたない”の時に出現した主な色を整理しました。

第10ステージと第12ステージを比較すると“緑色”、“灰緑色”、“緑褐色”などの濃い色が減少して、“黄緑色”、“淡灰黄緑色”、“黄褐色”などの淡い色が増加しています。

この理由はわかりませんが、水の色は日照条件で変化することが報告（第2回調査隊会議）されています。また、青潮（白濁）や赤潮（褐色）などの色にも影響されることが報告（第10回、第11回調査隊会議）されています。

青潮の発生メカニズムは

降雨

汚濁水の流入
（有機物、窒素、リン）

卵が腐ったにおい

植物性プランクトン（光合成）
動物性プランクトン
増殖
↓
死滅（有機物、窒素、リン）
沈降

沈降

淡水

堀川

有機物の分解に伴い酸素が消費
貧酸素の状態

硫化水素
(H_2S)

青潮

$2H_2S$（硫化水素）$+O_2 \rightarrow 2S$（硫黄コロイド）$+2H_2O$
$2H_2S$（硫化水素）$+CO_2$+光$\rightarrow CH_2O+2S$（硫黄コロイド）$+2H_2O$

海水

SO_4^{2-}
（硫酸イオン）
が含まれる

SO_4^{2-}（硫酸イオン）$+$有機物$\rightarrow S^{2-}+H_2O+CO_2$
$S^{2-}+H^+ \rightarrow HS^-$（硫化水素イオン）
HS^-（硫化水素イオン）$+H^+ \rightarrow H_2S$（硫化水素）

硫化物（H_2S, HS^-等）
として底泥や水中に蓄積

硫酸還元菌（主に底泥中）
＊酸素がない環境を好む菌
硫酸還元菌が有機物を分解する時に
硫酸イオンが還元され、硫化水素が発生する

瓶屋橋

尾頭橋

85

第12ステージに淡い色が増えた理由は？

第10ステージの場合

水の色を観察

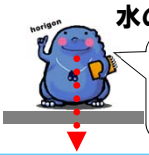
名古屋港

上流

淡水

塩水

第12ステージの場合



水の色を観察

透視度が高い表層の水（淡水）と白濁した底層の水（塩水）で2層化した堀川を橋などの上から見ると水の色が淡い色（白っぽく明るい色）に見えたのではないかと考えられます。

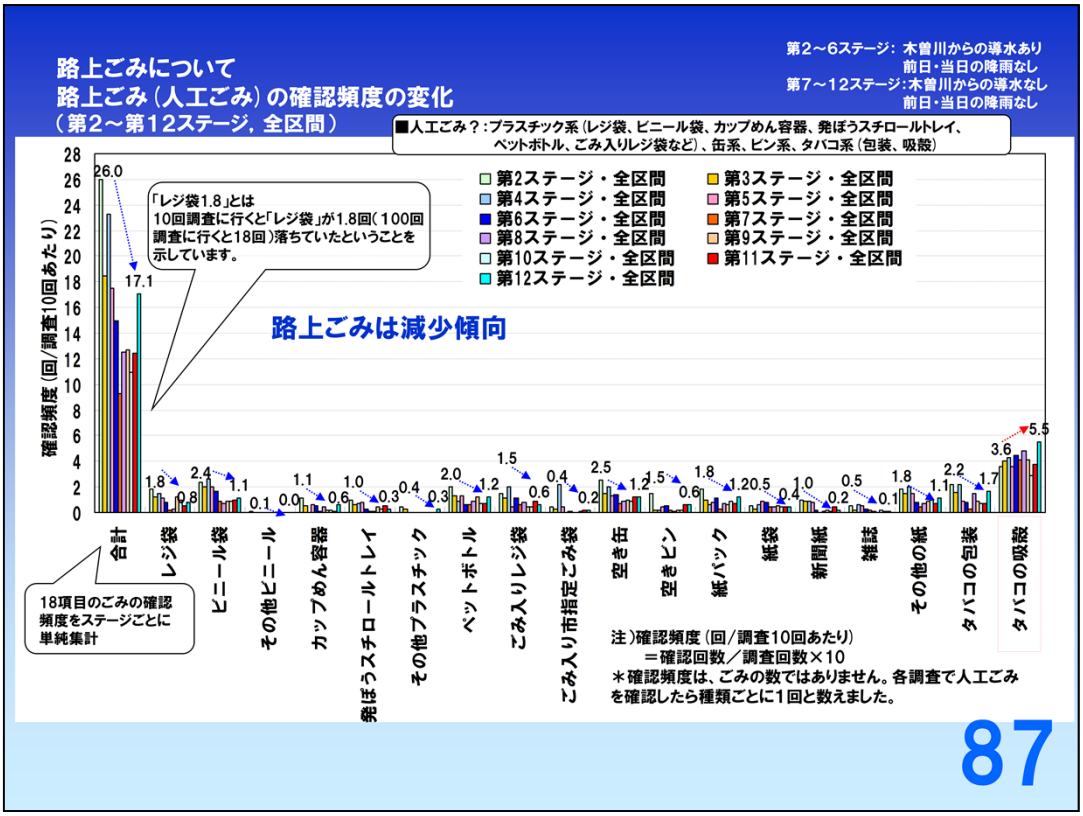
淡水

塩水

白濁した状態

第12ステージは、10月中旬まで気温が高い状態が続きました。このために堀川の底層の水（塩水）は貧酸素の状態が続き、白濁した状態（青潮：硫黄コロイドの増加）になりやすかったのではないかと考えられます。

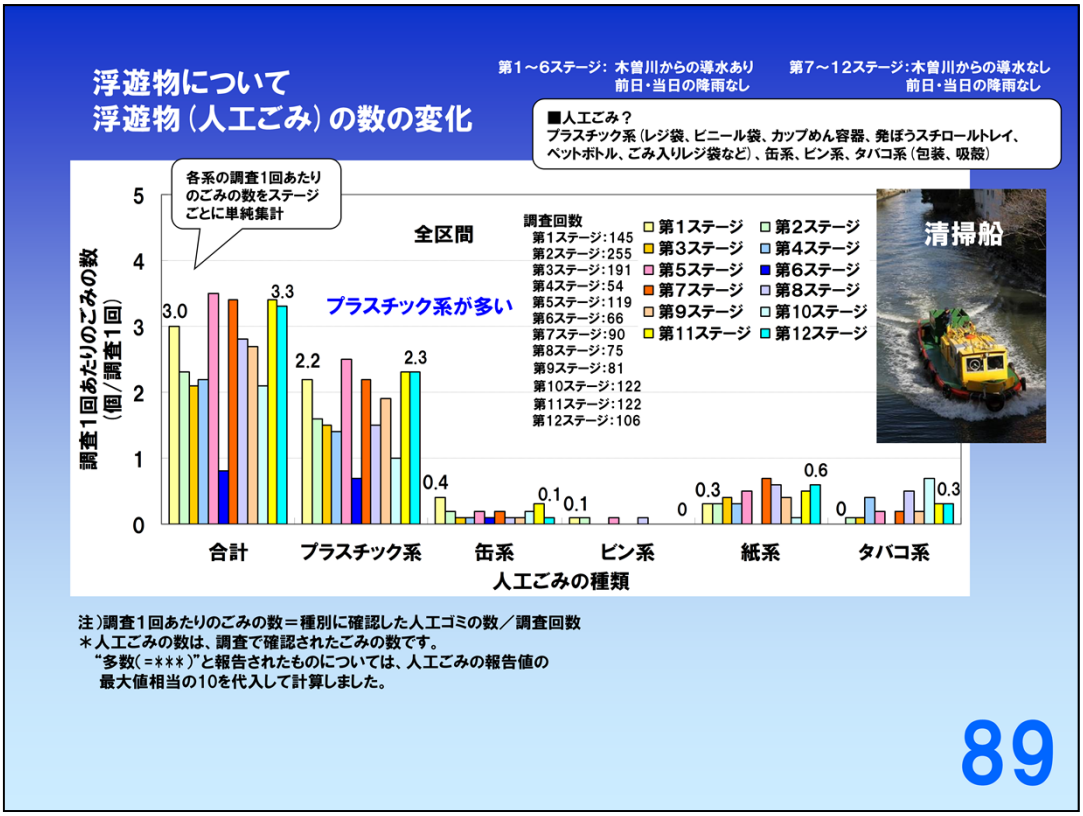
86



ごみ（人工ごみ）の変化を説明します。

路上ごみ（人工ごみ）は減少傾向です。清掃活動の活発化、レジ袋の有料化などの社会的な環境の変化も影響しているのかもしれません。

目にする頻度が最も高いのは、タバコの吸殻です。



路上ごみは減少の傾向ですが、浮遊ごみは減っていません。

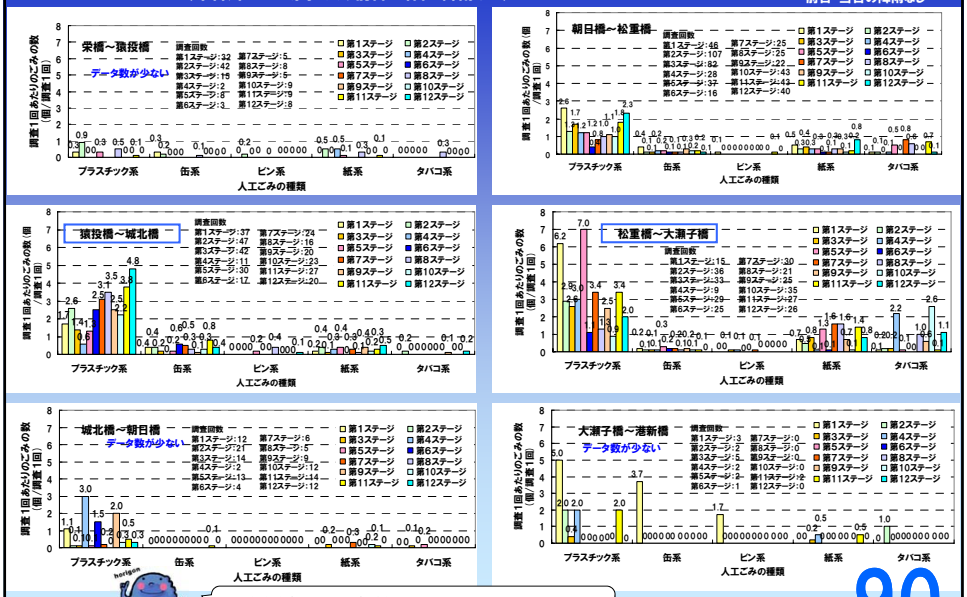
浮遊ごみは船で定期的に清掃が行われていますが、堀川に落下したごみは潮の干満で感潮区間を何度も行き来して、長い時間滞留しているためと考えられます。

浮遊ごみは特にプラスチック系が多くみられました。

浮遊物（人工ごみ）の数の変化

（木曽川からの導水あり、前日・当日の降雨なし）

第1～6ステージ：木曽川からの導水あり
前日・当日の降雨なし
第7～12ステージ：木曽川からの導水なし
前日・当日の降雨なし

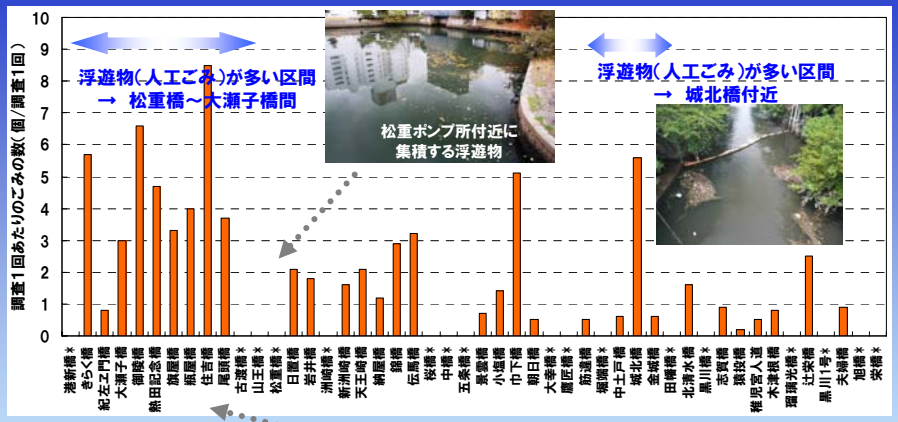


■浮遊物（人工ごみ）が多い区間は？
→猿投橋～城北橋間、松重橋～大瀬子橋間が多い。

90

浮遊物（人工ごみ）の縦断的な変化

第1～12ステージ　降雨なし　導水あり・なし全て　期間外データ含む



＊：調査数が10件以下の地点

注）調査1回あたりのごみの数＝浮遊物（人工ゴミ）の数／調査回数
＊浮遊物（人工ゴミ）の数は、調査で確認されたごみの数です。
“多数（=＊＊＊）”と報告されたものについては、人工ごみの報告値の最大値相当の10を代入して計算しました。

撮影：事務局

91

生き物について
堀川生物調査結果　堀川生物多様性会議
30種類の生き物を確認

項目		第1回調査 平成23年12月17日	第2回調査 平成24年5月20日	第3回調査 平成24年7月22日	第4回調査 平成24年9月1日	第5回調査 平成24年11月3日
調査地点	木津根橋			●		
	稚児宮人道橋	●	●			
	猿投橋下流	●	●	●		
	北清水親水広場				●	●
	中土戸橋		●		●	
爬虫類	ミシシッピアカミミガメ*		○			
魚類	オイカワ	○		○		
	タモロコ		○			
	モツゴ	○				
	カマツカ			○		
	ニゴイ		○			
	コイ		○	○	○	○
	フナの仲間			○	○(ヘラブナ)	
	メダカ	○(ヒメダカ)				
	カダヤシ*	○		○	○	
	オオクチバス*			○		
	ナイルティラピア*		○			
	ヨシノボリの仲間	○		○(トウヨシノボリ)		
	ウキゴリ	○				
	スミウキゴリ		○	○		
	マハゼ	○				
甲殻類	スジエビ	○		○		
	ミナミヌマエビ	○	○	○		
	テナガエビ			○		
	モクズガニ	○	○	○		
	ミズムシ		○			
	アメリカザリガニ*	○				
昆虫類	トンボ類の幼虫		○	○		
貝類	カワニナ		○			
	マシジミ	○	○			
水草	ヤナギモ	○	○			
	セキショウモの仲間	○	○			
	オオフサモ*	○				
	オオカナダモ*		○			
	コカナダモ*	○				

＊印：外来種

撮影：事務局

93

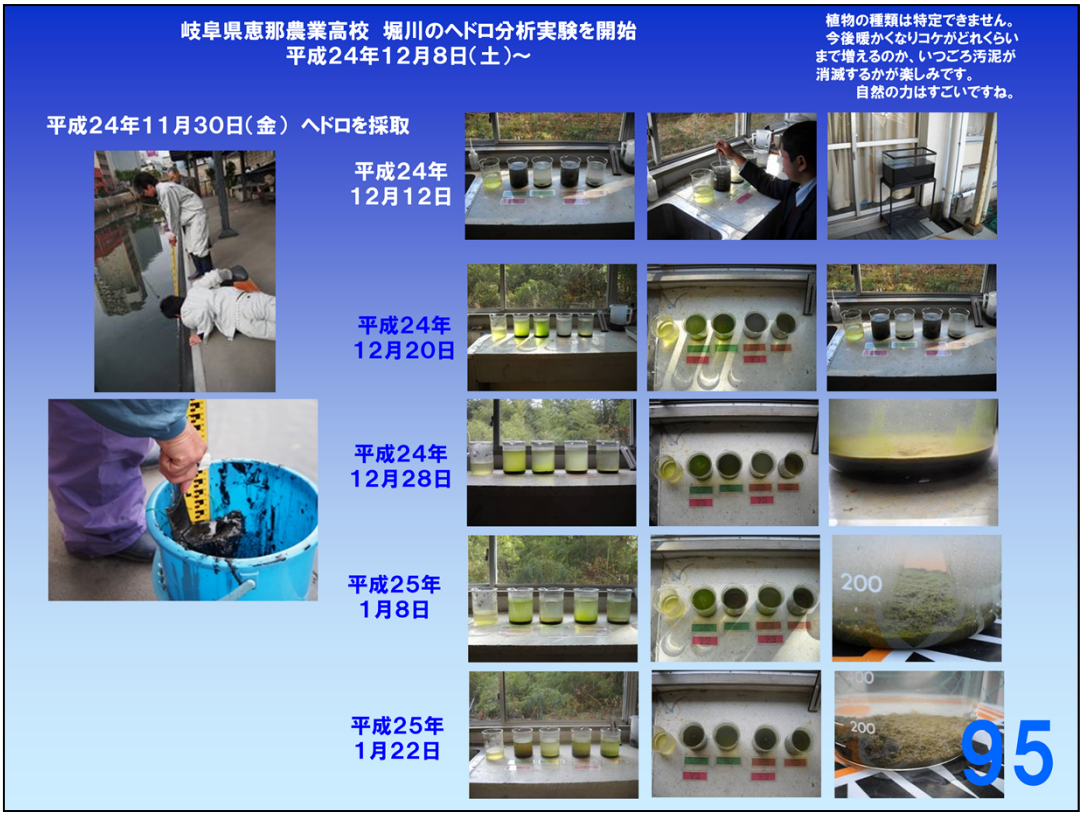
この調査には、調査隊からも多くの方が参加しています。

これまでの4回の調査で30種類の生き物が確認されました。このうち、8種は外来種でした。魚類は15種でした。このうち、3種が外来種でした。

今年も恵那農業高等学校と名古屋堀川ライオンズクラブが平成24年6月22日～11月30日の間で空心菜による堀川浄化実験を実施しました。

空心菜の浮島には、たくさんの生き物が集まっていました。

気温が下がった11月末にはすべて枯れてしまいました。空心菜は堀川で越冬できないようです。



恵那農業高校が堀川のヘドロ分析実験を開始しました。

恵那農業高校の森本先生の報告(抜粋)

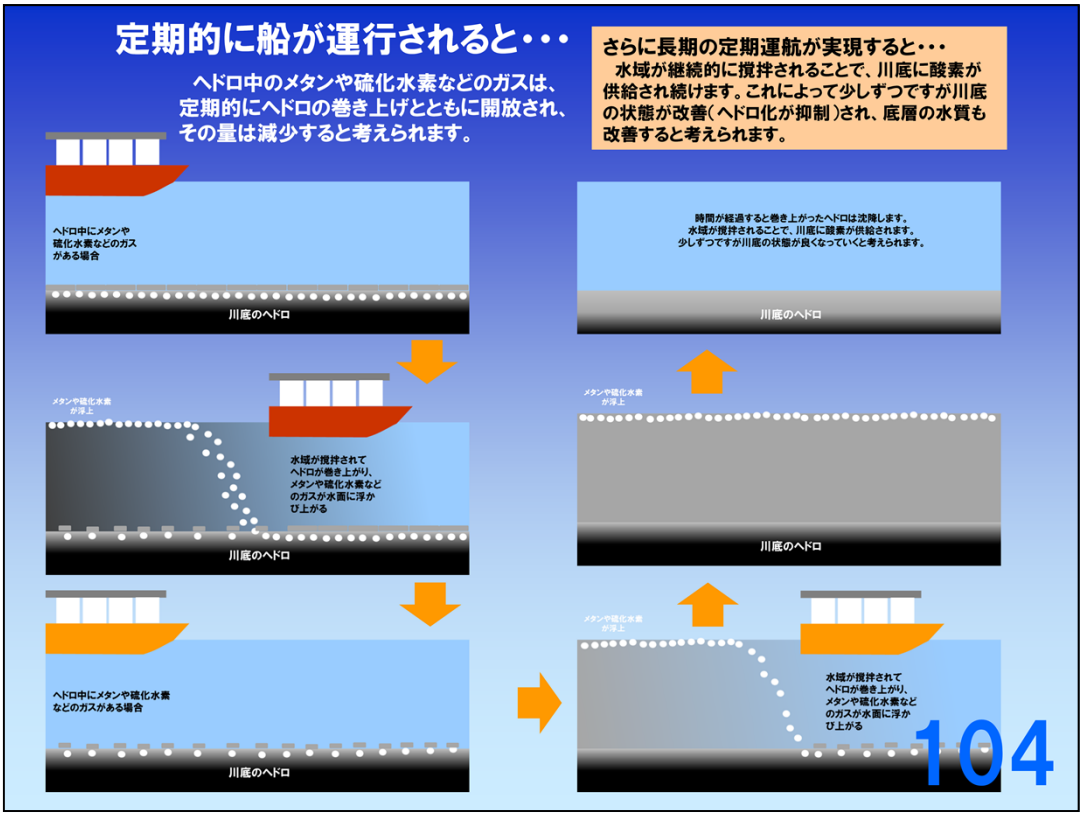
「植物の種類は特定できていません。今後暖かくなりコケがどれくらいまで増えるのか、いつごろ汚泥が消滅するかが楽しみです。自然の力はすごいですね。」

堀川で吹いている風について説明します。
第1ステージから第12ステージまでの全部のデータを使って、整理をしてみました。
横から吹く風よりも、堀川に沿って吹く風の割合の方が多いようです。
錦橋では約8割が堀川に沿って風が吹いているようです。

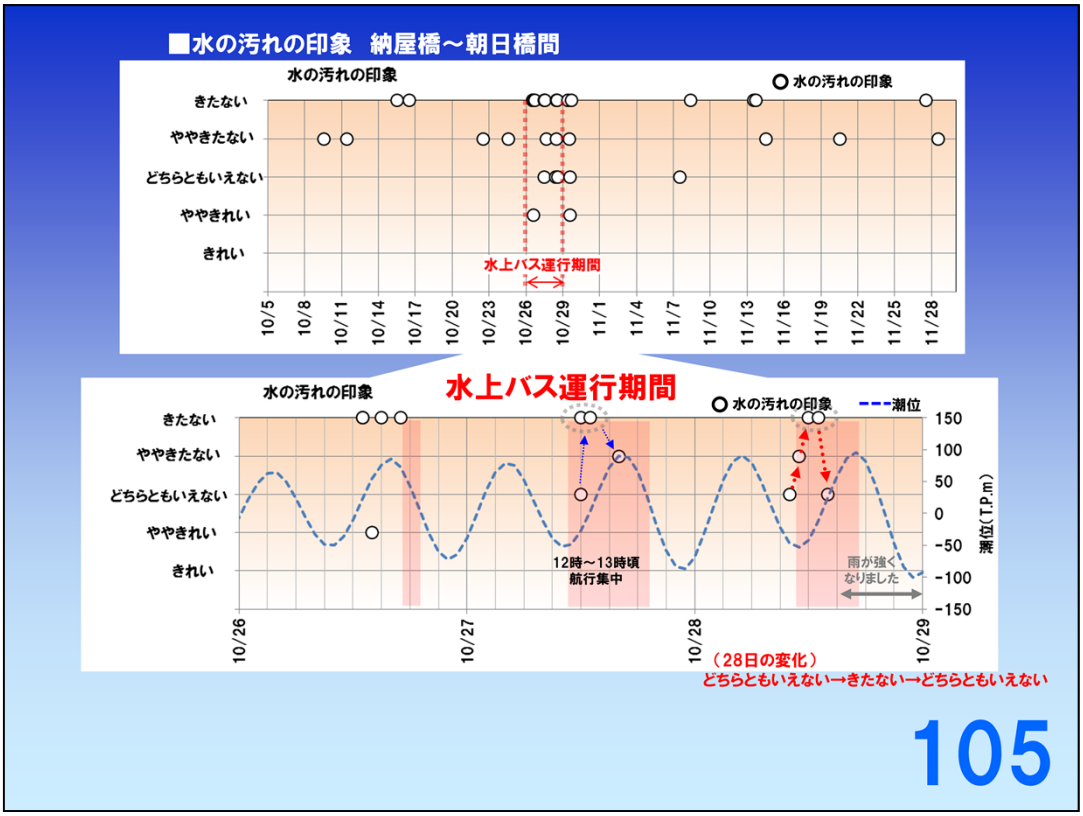
今回の一斉調査では、水上バスの運行が短期間（３日間）であったこと、３日目に雨が降ってしまったことから、水上交通による堀川の変化を市民の視点と感覚（水の汚れの印象など）で定量的に確認することができませんでした。しかし、以下のことを記録として残すことができました。

それは水上バスが運行されると水域が撹拌され、川底の表面にある灰色のほこりのようなもの（浮泥）とその下の黒い泥（以下、ヘドロ）が巻き上がり、水が濃い灰色に濁ることです。そして、特に船が航行した直後には、ヘドロの中に生成されたメタンや硫化水素などの気体がヘドロとともに巻き上げられ、開放された気体は多くの泡となって水面に浮かび上がる様子が確認されました。これらの事実関係から定期的に船が運行された時に堀川でどのような変化が生じるのかをより現実的に考えるための知見が得られました。

さらに定期的に船が運行され、定期的に水域が撹拌されると、ヘドロの巻き上げとともに、ヘドロ中のメタンや硫化水素などのガスも定期的に開放され、泡の量は減少すると考えられます。さらに長期の定期運行が実現すると、水域が継続的に撹拌されることで、川底に酸素が供給され続けます。これによって少しずつですが川底の状態が改善（ヘドロ化が抑制）され、底層の水質も改善すると考えられます。

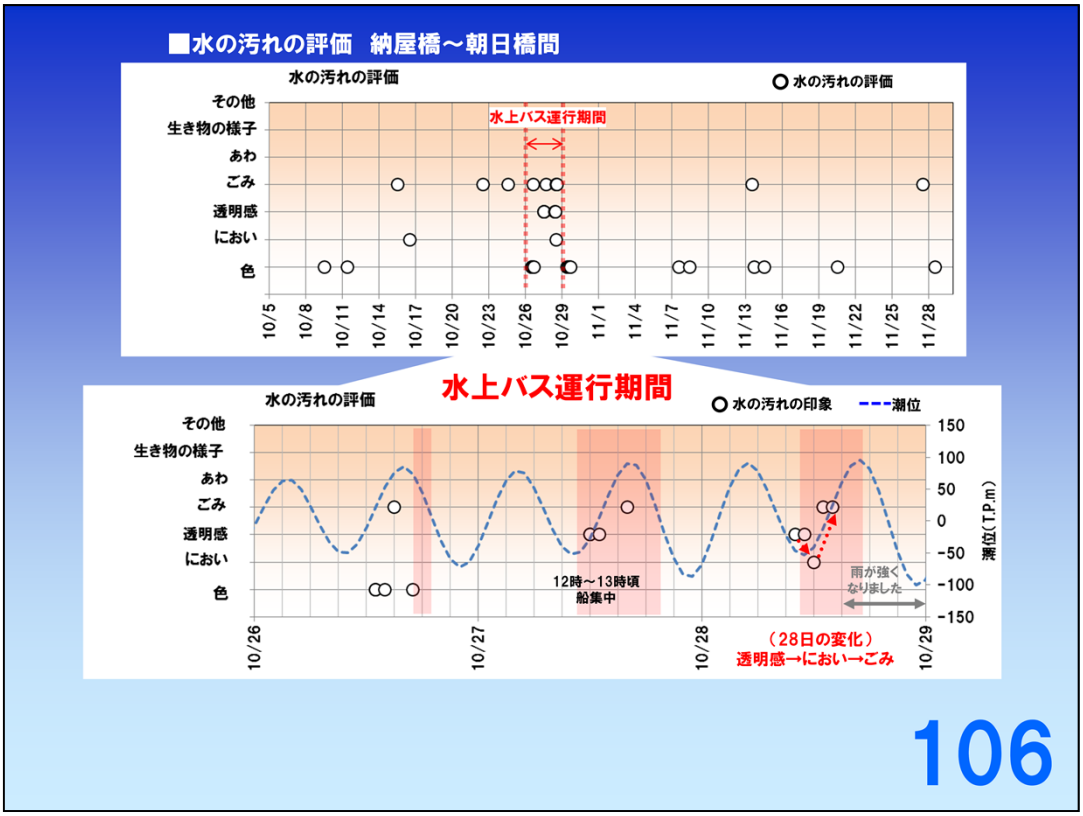


さらに長期の定期運航が実現すると、水域が継続的に撹拌されることで、川底に酸素が供給され続けます。これによって少しずつですが川底の状態が改善(ヘドロ化が抑制)され、底層の水質も改善すると考えられます。



水上バス運行期間の水の汚れの印象は、一日の中でも“ややきれい”～“きたない”まで変化しました。

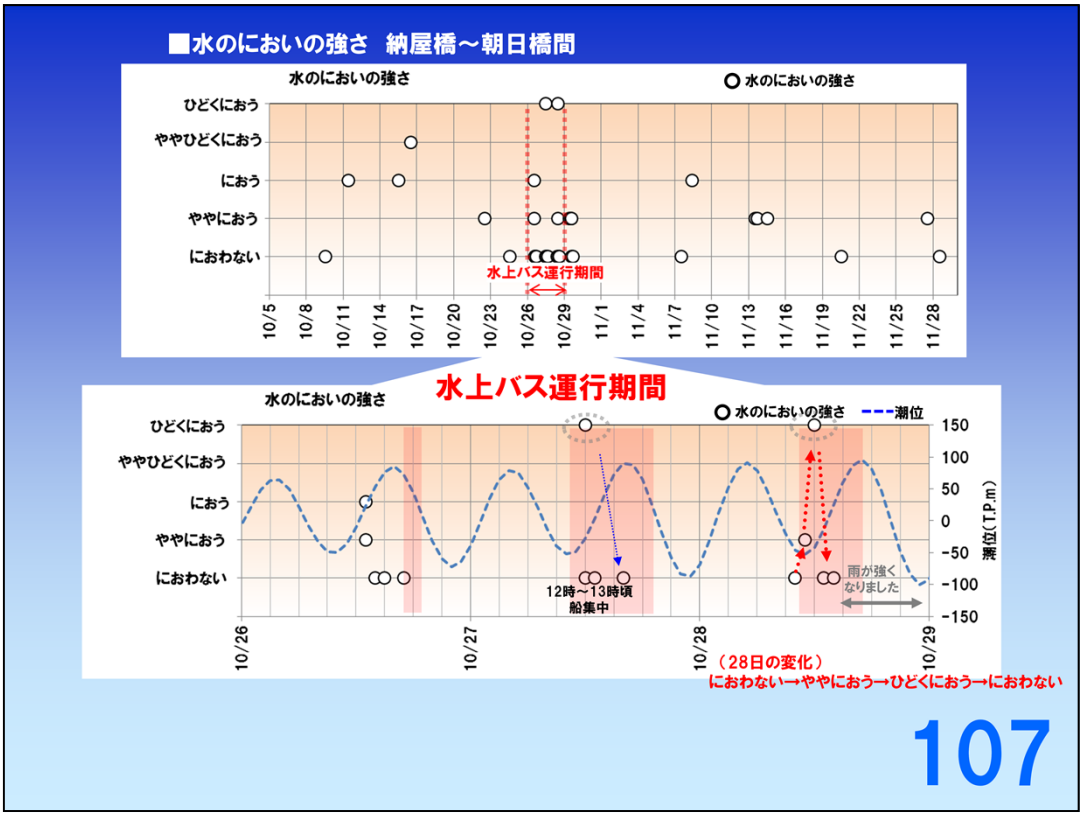
10月28日は水上バスが運行する前に“どちらともいえない”でしたが、運行がはじまった後には“きたない”になりました。その後、“どちらともいえない”の印象にもどりました。



水上バス運行期間の水の汚れは、主に“ごみ”、“透明感”、“色”で評価されていました。“におい”での評価は少なく、“あわ”での評価は0でした。

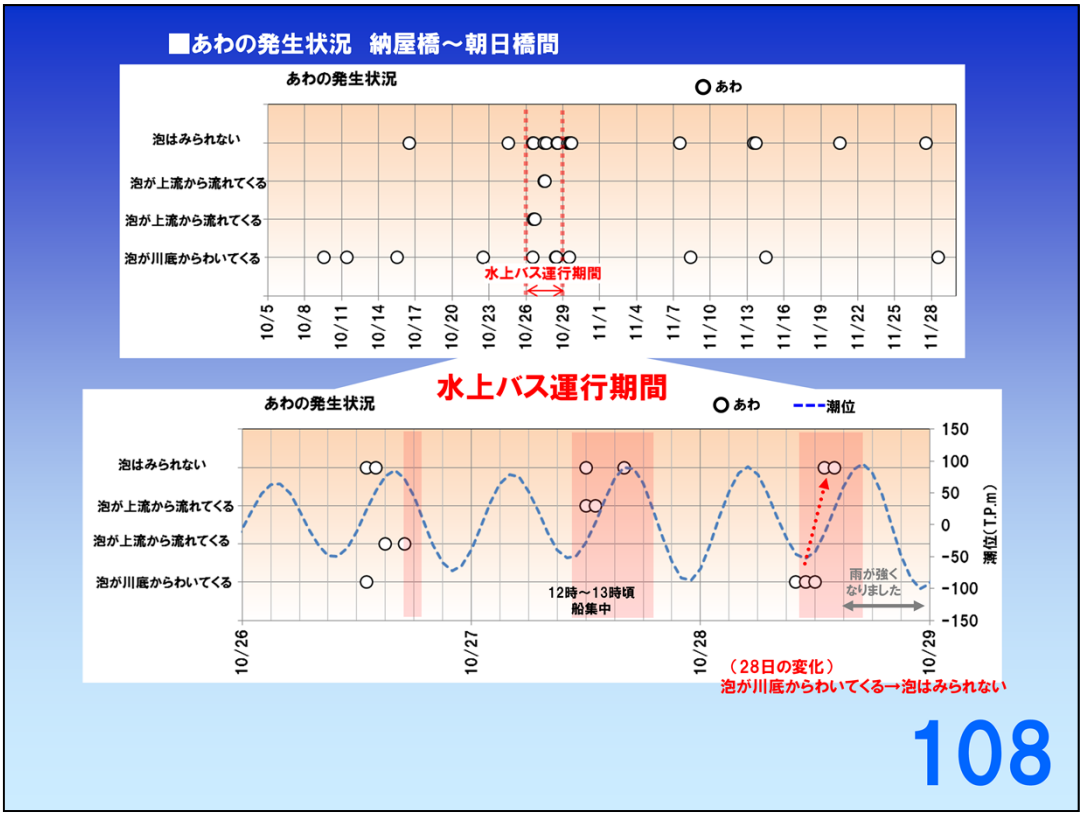
10月28日は水上バスが運行する前と直後に“透明感”で評価がされました。

運行がはじまった後には“におい”の評価になり、その後は“ごみ”で評価がされました。



水上バス運行期間の水のにおいの強さは、主に“においわない”～“ややにおう”でした。

10月28日は、水上バスが運行される前に“においわない”、運行開始直後に“ややにおう”、運行中に一時的に“ひどくにおう”の状態になりました。その後は運行中でも“においわない”の状態になりました。



水上バス運行期間は、主に“泡が川底からわいてくる”と“泡はみられない”でした。

10月28日は、水上バスの運行前と直後に“泡が川底からわいてくる”の状態でした。その後の運行中は“泡はみられない”の状態になりました。

河川計画課調査隊

堀川水上バスに乗船していただいた時に感じた堀川の臭い(におい)について、アンケート調査をしました。

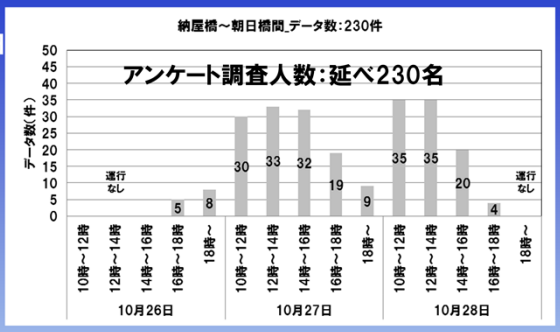
■ 調査実施期間:平成24年10月26日～28日

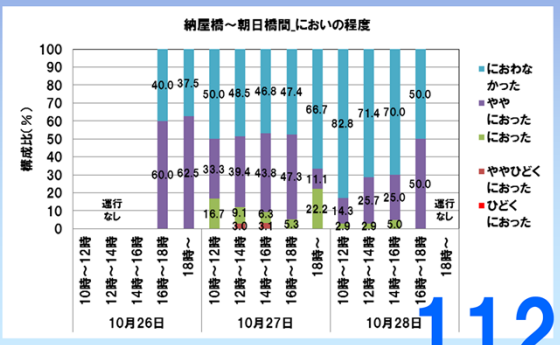
アンケート調査票

堀川に関するアンケート調査

堀川水上バスに乗船していただいた時に感じた堀川の臭い(におい)について教えてください。

時間帯	ひどくにおった	ややひどくにおった	においた	ややにおった	においなかった
10時～12時					
12時～14時					
14時～16時					
16時～18時					
18時～					

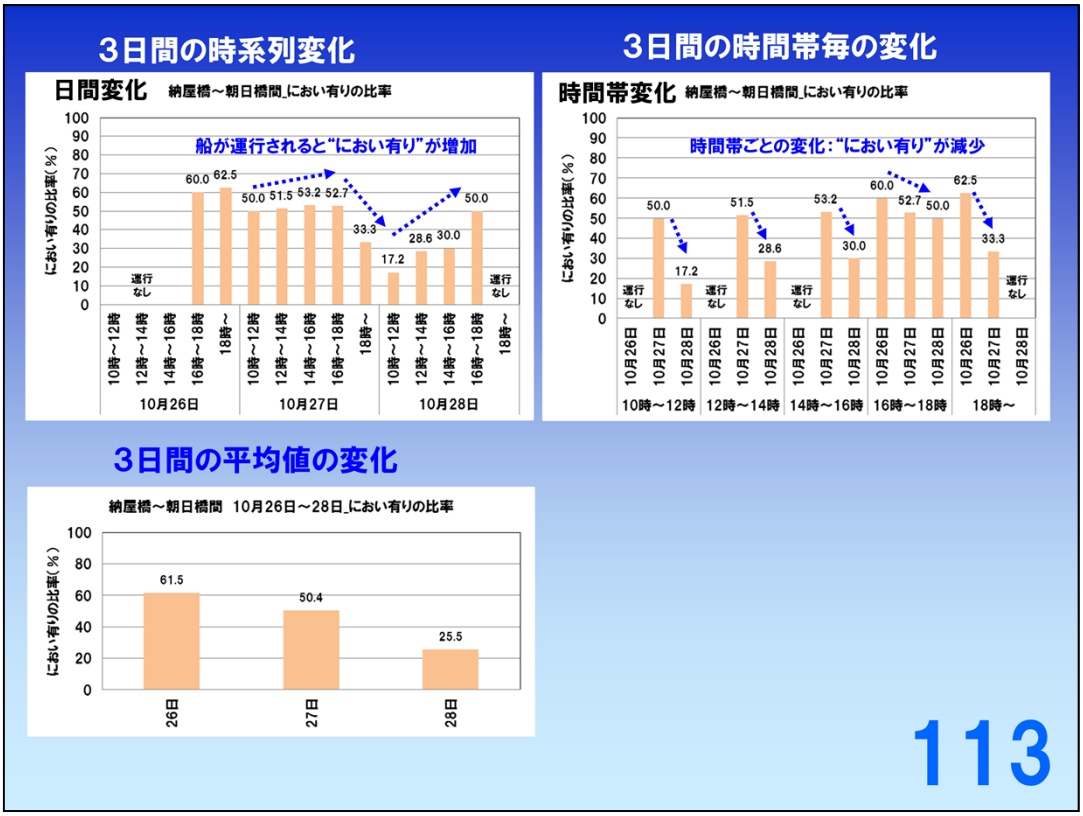




10月27日は“ひどくにおった”があり、27日はなかった

112

10月27日は12時から16時の間で“ひどくにおった”という回答があった。しかし、27日はなかった。



アンケート調査の結果をもとに水上バス運行期間の“におい有り”と答えられた方の比率を整理しました。

船が運行されると“におい有り”の比率が増加しました。

なお、“におい有り”と答えられた方の比率は、日毎に減少していました。これは時間帯ごとに整理をした結果からも同様な結果が得られました。

新堀川に広がる調査活動

新堀川は市民主体の調査活動がほとんど行われておらず、市民の視点と感覚による水質の評価がされていませんでした。
平成24年9月から新堀川の記念橋の近くにオフィスを構える“チームNTTスマイルなごや調査隊”が調査活動を開始しました。これまでに5回の調査（２月23日現在）が行われました。
また、名古屋市高年大学環境学科OBの方々が結成した“鯱城・堀川と生活を考える会”でも平成24年12月から新堀川での調査活動を開始しました。これまでに3回の調査（２月23日現在）が行われました。新堀川での腐卵臭や白濁（淡灰黄緑色）の発生が報告され、発生メカニズムの解明のため調査データの蓄積が進められています。

チームNTTスマイルなごや調査隊

鯱城・堀川と生活を考える会調査隊

チームNTTスマイルなごや調査隊　　レポートの紹介
http://www.horikawa1000nin.jp/katudou/2013-01-31-nttsmile.htm

鯱城・堀川と生活を考える会調査隊　　レポートの紹介
http://www.horikawa1000nin.jp/katudou/2013-02-04-kojou-sinhorikawatyousa.htm